仙台市文化財調査報告書第32集

鴻ノ巣遺跡

—発掘調査報告書—

昭和56年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第32集

鴻ノ巣遺跡

—発掘調査報告書—

昭和56年3月

仙台市教育委員会

序　　文

七北田川（冠川）流域には長命館・松森城（泉市)・笹森城・岩切城(仙台）等多くの城・館跡が分布しており、中世時代の歴史の香を今に伝えているところといえます。なかでも、留守氏の居城と伝えられる岩切城は要害堅固な城郭として著名であります。その麓には七北田川両岸に今市を中心とする集落が発達し、河川を利用した交易場として栄えたところだとも言い伝えられています。本書で報告している鴻ノ巣遺跡は七北田川右岸に位置し、古墳時代から中世にかけての遺跡として周知されてきた遺跡であります。しかし、都市化の影響をうけ、近年宅地化が進んでいます。今回の調査も宅地造成に係る発掘調査として実施されてきたものであります。

本報告はその調査成果をまとめたものでありますが、調査に際しましては多くの方々の御協力を賜わりました。深く感謝申し上げます。本書が多くの学徒、研究者、市民各位の参考資料となることを念じてやみません。

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本報告書は仙台市岩切字鴻ノ巣に所在する鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書である。

2．本文の執筆は下記のとおり分担し、編集は金森安孝が行なった。

工藤哲司……Ⅵ、Ⅶ

金森安孝……Ⅰ～Ⅴ、Ⅶ

3．本報告書中の実測図のトレースは次のとおり分担した。

遺構実測製図…金森安孝、真山尚幸、小林広美

遺物実測製図…工藤哲司、金森安孝、斎藤秀寿、真山尚幸、小林広美

4．本報告書中の写真は次のとおり分担した。

遺構写真…工藤哲司、金森安孝

遺物写真…工藤哲司、金森安孝、小林広美

5．本報告書の土色については「新版標準土色帳」(小山、竹原：1973年) を使用した。

6．本報告書の実測図中の方位は磁北で統一してある。

7．遺物の分類は下記のとおりである。

A類　土　製　品

土　師　器	A　001 ～ 100
土師質の土器	A　101 ～ 200
須　恵　器	A　201 ～ 300
中世陶器	A　301 ～ 400
青　　磁	A　401 ～ 500
瓦	A　501 ～ 600
そ　の　他	A　601 ～ 700

B類　金属製品

刀	B　001 ～ 100
古　　銭	B　101 ～ 200

C類　石　製　品

石　　臼	C　001 ～ 100

D類　木　製　品

井戸枠材	D　001 ～ 100
木　　桶	D　101 ～ 200

本　文　目　次

序　　文
例　　言
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　調査要項……1
Ⅲ　遺跡の位置と環境……2
Ⅳ　調査の方法と概要……3
Ⅴ　発見遺構……5
1．井　戸　跡……5
2．土　　壙……17
3．焼土遺構……24
4．溝　　跡……28
5．掘立柱建物跡……33
6．そ　の　他……35
Ⅵ　出土遺物……36
1．土　製　品……36
(1)　土　師　器……36
(2)　土師質の土器……37
(3)　須　恵　器……38
(4)　中世陶器……39
(5)　青　　磁……40
(6)　瓦……41
(7)　その他の土製品……41
2．金属製品……41
(1)　刀……41
(2)　古　　銭……41
3．石　製　品……43
4．木　製　品……43
(1)　井戸枠材……43
(2)　桶……43
Ⅶ　ま　と　め……44

挿図・表・図版目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第２図　調査区設定図……4
第３図　遺構配置図……6・7
第４図　調査区土層図……8・9
第５図　16号井戸実測図……12
第６図　３号井戸実測図……14
第７図　井戸跡実測図(1)……15
第８図　井戸跡実測図(2)……16
第９図　井戸跡実測図(3)……18
第10図　土壙実測図(1)……19
第11図　土壙実測図(2)……21
第12図　土壙実測図(3)……23
第13図　28号・30号土壙、１号焼土遺構実測図……24
第14図　掘立柱建物跡・掘立柱列・溝跡平面図……26・27
第15図　土師質の土器Ａ101出土状況図 …28
第16図　土師器甕Ａ004出土状況図 ……28
第17図　土師器坏Ａ009・Ａ010出土状況図29
第18図　土師器坏Ａ011出土状況図 ……29
第19図　須恵器坏Ａ207・Ａ208出土状況図29
第20図　溝跡・４号旧河道土層図……30
第21図　古銭拓影……43
第22図　出土遺物実測図(1)……47
第23図　出土遺物実測図(2)……48
第24図　出土遺物実測図(3)……49
第25図　出土遺物実測図(4)……50
第26図　出土遺物実測図(5)……51

第１表　調査区土層註記表……10・11
第２表　16号井戸土層註記表……11
第３表　井戸跡一覧表……17
第４表　土壙土層註記表(1)……20
第５表　土壙土層註記表(2)……22
第６表　28号・30号土壙、１号焼土遺構土層註記表……25
第７表　土壙一覧表……25
第８表　溝跡土層註記表……31
第９表　溝跡一覧表……32
第10表　土器破片集計表……42

図版１　調査区全景（東より）……52
図版２……53
　１．調査区遠景（調査前・東より）
　２．16号井戸全景（東より）
　３．16号井戸土層（北より）
図版３……54
　１．井戸枠材出土状況（16号井戸・南より）
　２．３号井戸全景（北より）
　３．木材出土状況（３号井戸・西より）
図版４……55
　１．桶出土状況（３号井戸・南より）
　２．５号井戸全景（南より）
　３．６号井戸全景（東より）
図版５……56
　１．７号井戸全景（西より）
　２．９号井戸全景（北より）
　３．10号井戸全景（北より）

図版６……57
１．15号井戸全景（北より）
２．17号井戸全景（北より）
３．４号土壙全景（西より）
図版７……58
１．18号土壙全景（東より）
２．27号土壙全景（東より）
３．１号焼土遺構全景（北より）
図版８……59
１．４号溝確認状況（南より）
２．４号溝土層（Ａ－Ａ′、北より）
図版９……60
１．４号溝土層（Ｂ－Ｂ′、北より）
２．土師器甕Ａ004出土状況（４号溝、西より）
３．土師器坏Ａ009・Ａ010出土状況（４号溝、西より）
図版10……61
１．土師質の土器Ａ101出土状況（４号溝、西より）
２．６号溝Ａ層土層（南より）
３．６号溝Ｂ層土層（南より）
図版11……62
１．須恵器坏Ａ207・Ａ208出土状況（６号溝、北より）
２．８号溝土層（東より）
３．９号溝全景（東より）
図版12　土師器・土師質の土器……63
図版13　須恵器……64
図版14　中世陶器・青磁……65
図版15　瓦・近世陶器・金属製品・石製品……66
図版16　木製品・植物遺体……67

Ⅰ　調査に至る経過

鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－135）は、仙台市岩切字鴻ノ巣にあり、七北田川右岸の自然堤防上に位置する遺跡である。

昭和48年４月から６月には、東北新幹線の路線敷にかかった同遺跡東部を、宮城県教育委員会が記録保存を目的とした発掘調査を行ない、その結果、古墳時代中期・南小泉式期の竪穴住居跡２軒の他、中世に至るまでの多くの遺物を出土した。

仙台近郊の宅地化は同遺跡にも及び、同市岩切字鴻ノ巣80番外もその予定地に上ったため仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係では、この開発地が遺跡の範囲内に位置していることから、開発者と協議し試掘調査を実施して再度協議することになった。

試掘調査を昭和55年３月10日に実施して遺構の確認を行なったところ、平安時代に属する遺物を出土する包含層が確認された。このことから開発予定地について再度協議の結果、開発部分の記録保存調査を実施することとし、同年４月８日より本調査を実施した。

Ⅱ　調　査　要　項

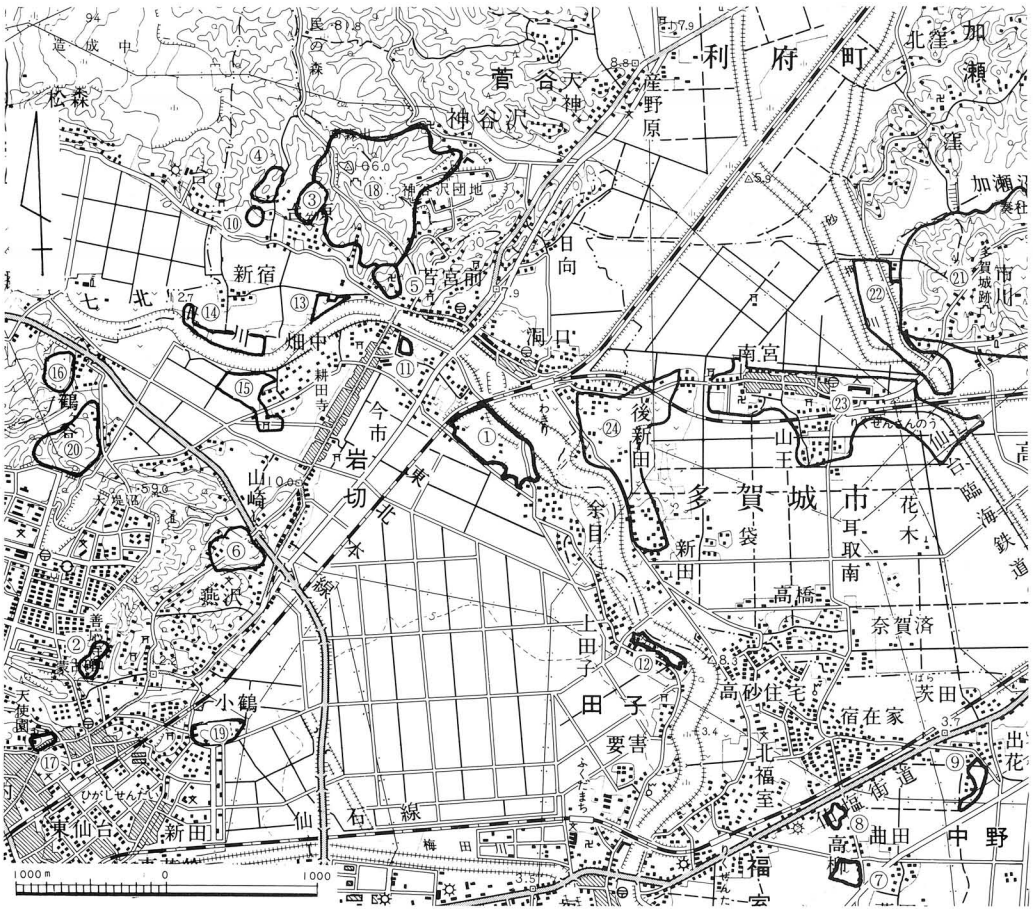
○遺跡名称　　鴻ノ巣遺跡（Ｃ－135）
○所　在　地　　仙台市岩切字鴻ノ巣80番外
○調査主体　　仙台市教育委員会
○調査担当　　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

○担当職員　　試掘調査…工藤哲司、佐藤甲二
　　本　調　査…工藤哲司、金森安孝
○調査期間　　試掘調査…昭和55年３月10日
　　本　調　査…昭和55年４月８日～５月29日
○調査参加者　　森剛男、斎藤秀寿、佐藤政人、佐藤正弘、松本寿一、白井一夫、坂忠彦、柿沼敏朗、阿蘇幸二、飯泉寿裕、鈴木健一、相沢林三郎、永野正、相沢勇、加藤久、早坂林治、石垣巧、関場又蔵、藤沢美智、武田ふみ子、佐藤睦子、中塩幸子

○調査協力　　高橋興業㈱、岩切中区町内会々長相沢林三郎

Ⅲ　遺跡の位置と環境

鴻ノ巣遺跡は、仙台駅の北東約７kmの仙台市岩切字鴻ノ巣にある遺跡である。北西の丘陵地帯から平野部に流れ出た七北田川は、土砂の堆積と氾濫を繰り返し、沖積平野を形成した。また両岸に発達した自然堤防帯を形づくり、遺跡はこの起伏の少ない自然堤防の右岸上にあって標高は約８ｍである。現在は畑地として利用されているが、周囲には水田も多く、宅地化が進んできている。



1．鴻ノ巣遺跡(C―135)
2．善応寺横穴群(C―027)
3．台屋敷横穴群(C―029)
4．入生沢横穴群(C―030)
5．東光寺横穴群(C―032)
　東光寺城跡(C―508)
　東光寺古碑・磨崖仏(C―602)
6．燕沢遺跡(C―101)
7．高柳Ａ遺跡(C―173)
8．高柳Ｂ遺跡(C―174)
9．出花遺跡(C―176)
10．入生沢遺跡(C―184)
11．今市遺跡(C―200)
12．堰下遺跡(C―218)
13．新宿囲遺跡(C―219)
14．大正囲遺跡(C―220)
15．岩切畑中遺跡(C―221)
16．北畑遺跡(C―237)
17．大蓮寺窯跡(C―415)
18．高森城跡(C―502)
19．小鶴城跡(C―509)
20．笹森城跡(C―512)
21．多賀城跡
22．市川橋遺跡
23．山王遺跡
24．新田遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡周辺の歴史的環境をみると、古墳時代の遺跡としては、本遺跡の対岸にある新田遺跡（多賀城市）西方丘陵地帯の麓には、善応寺、台屋敷、入生沢等の横穴古墳群がみられる。

古代に入ると、陸奥国の国府である多賀城跡が本遺跡の東方約３㎞におかれ、大蓮寺窯跡等の台ノ原・小田原窯跡群をはじめ、各地で奈良、平安時代の土師器、須恵器、瓦が製作され、これらの土器を出土する遺跡が多数存在する。

中世の遺跡では、北西丘陵上に国指定史跡である高森城（岩切城、鴻ノ巣館）がある。これは源頼朝によって、陸奥国府留守職に補任された伊沢（留守）家景が構えた館で、麓には留守氏の菩提寺である東光寺や、中世の磨崖仏、板碑が多数残っている。近辺には小鶴、笹森城などいくつかの中世の館跡があり、鎌倉時代から戦国時代末期にかけての要害の地であったことがうかがえる。留守家文書によると、当時冠川と呼ばれていた七北田川に「今市橋」が架けられ、冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの地名がみられ、鎌倉時代には石巻街道にそって七北田川流域には集落が発達しており、すでに商業活動が営まれていたものと思われる。

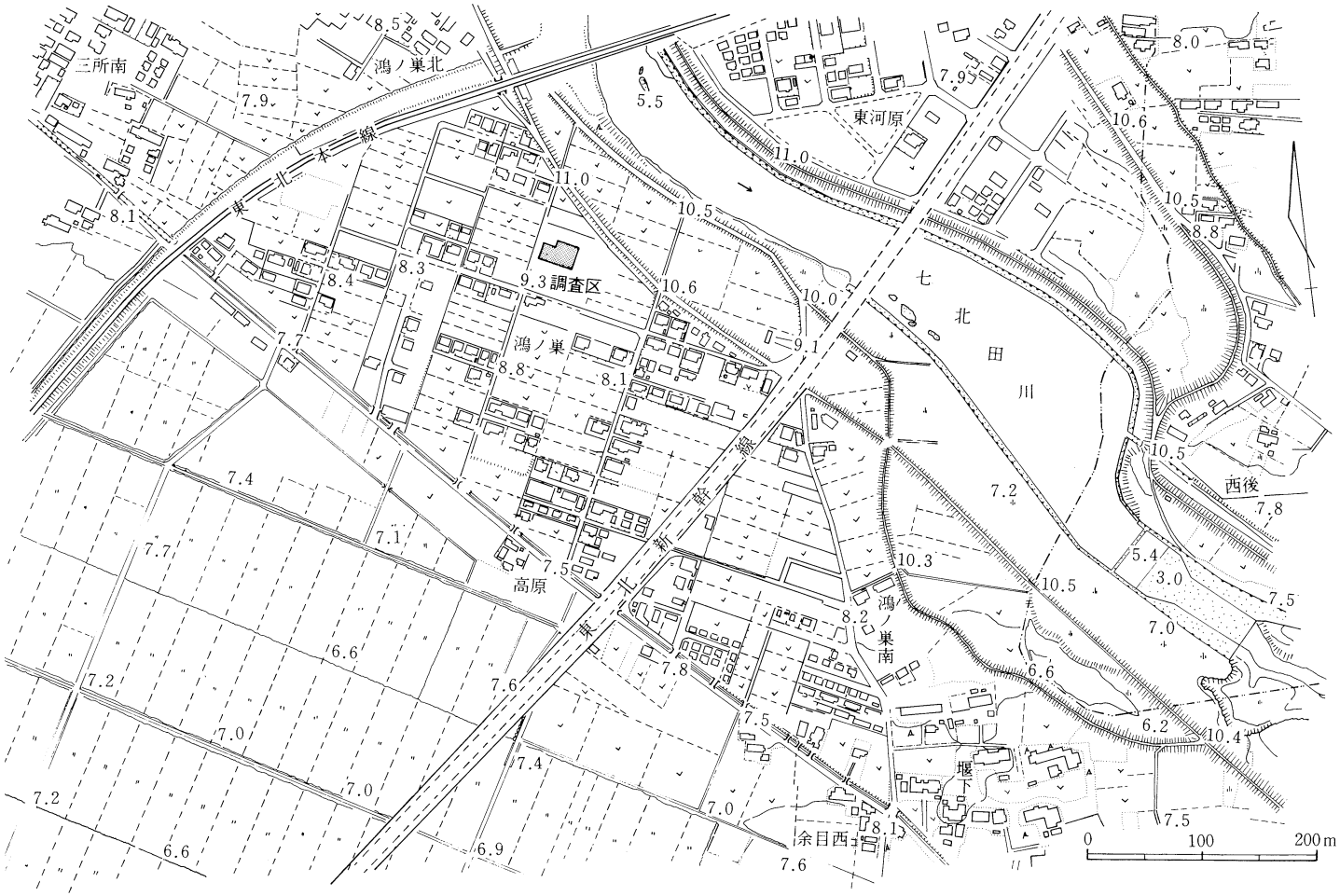
宮城県教育委員会が行なった発掘調査によれば、本遺跡の東部からは古墳時代中期・南小泉式期の竪穴住居跡２軒が検出されたほか、平安時代に属する土器や中世以降の陶器、磁器も出土している。

以上のように、本遺跡周辺には、古くは古墳時代から近世に至る遺跡が数多く存在している。

Ⅳ　調査の方法と概要

発掘調査は４月８日より実施し、開発面積2,034㎡のうち、排土等を考慮した約540㎡を調査した。調査区は東西約30ｍ、南北約20ｍの北西部で凹む鍵形に設定した。表土はユンボを用いて調査区西部で地表下約60cm、東部で約160cm程掘り下げた。

遺跡の基本層位は大きくみて５層に分けられる。第Ⅰ層：山砂の盛土および旧耕作土で厚さは20cm～１ｍ程のにぶい黄褐色ないし黒褐色シルト層である。第Ⅱ層：30～50cmの黒褐色シルト層で少量の遺物、炭化物を含む。第Ⅲ層：20cm程で４層に細分され、トレンチ中央に部分的に堆積している。Ⅲ－１層はにぶい黄褐色砂質粘土層で、炭化物、パミスを含む。Ⅲ－２層は灰黄褐色シルト層で炭化物を含む。Ⅲ－３層は褐色砂質シルト層で、炭化物、パミス、酸化鉄を含む。Ⅲ－４層は灰黄褐色粘土質シルトで酸化鉄、遺物（土師器片）を含む。Ⅲ－１層、Ⅲ－３層が大部分である。第Ⅳ層：５～30cmの灰黄褐色粘土質シルト層で遺構確認面である。粒子が粗く、酸化鉄を含む。第Ⅴ層：10～20cmの黄褐色シルト質粘土層である。第Ⅵ層：黒褐色シルト質粘土層である。トレンチ東部では旧河川のために第Ⅱ～Ⅴ層がなく、第Ⅴ層ないしは


三所南
鴻ノ巣北
東北本線
東河原
七北田川
9.3 調査区
鴻ノ巣
高原
東北新幹線
鴻ノ巣南
西後
堰下
余目西
0
100
200m

第２図　調査区設定図

Ⅵ層が遺構確認面となっている。

遺構は調査区のほぼ全域から検出されるが、特に、調査区中央部を南北に走る溝（６号溝）の西側微高地で密集度が高く、次いで、調査区北側を東西に延び、東寄りで南に曲がる⊓字形の溝（１号溝）にはさまれる部分で多く、１号溝の北側と東側では殆んど検出されない。

検出された遺構には、井戸跡11基、土壙19基、焼土遺構１基、溝跡10条、掘立柱建物跡13棟以上、さらに柱穴を含むピット約240個がある。時期的には、平安時代から中世にかけての遺構である。

実測方法は、調査区全域に３ｍ方眼の遣り方を設定し、新しい時期より順次実測し、調査は延べ32日を費やし、５月29日に終了した。

Ⅴ 発 見 遺 構

１．井 戸 跡

調査区全域から総数11基の井戸跡が検出された。形態的にみて大別すると次の４つの型式に分類される。

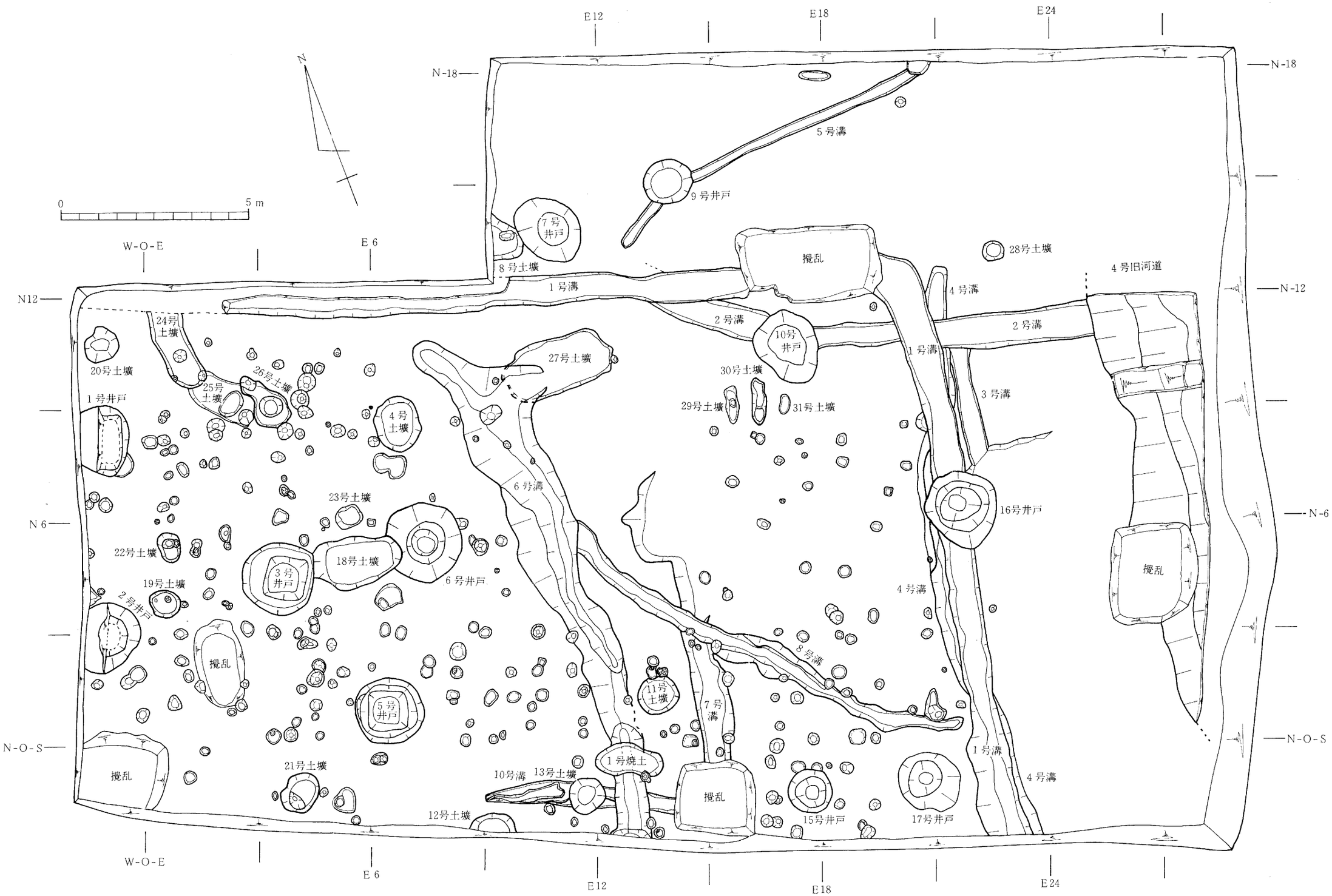
Ａタイプ…円形の掘り方の中にさらに円形の素掘りがあり井側を組んでいるもの。

Ｂタイプ…円形の掘り方の中に方形の素掘りがあるもの。

Ｃタイプ…円形、楕円形の掘り方で円筒形の素掘りのもの。

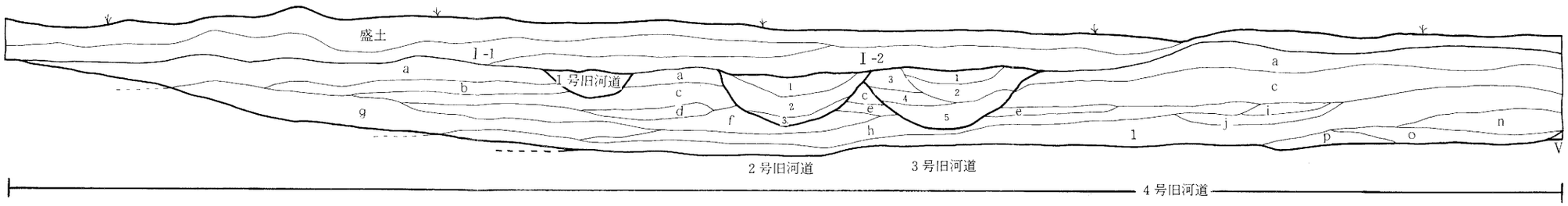
Ｄタイプ…円形の掘り方で底に近づくに従って段々にすぼまっていく素掘りのもの。

Ａタイプ　16号井戸１基である。16号井戸は確認面で206×190cmの歪んだ円形の掘り方に１辺90cm程の方形の井側を有するもので、深さは194cm、井側は上部が消失している。残存する井戸枠材とその遺存状況から推定すると、四隅に四ッ割の基礎柱を杭のように打ち込み（第５図：⑩・㉗)、その上部に隅柱（横木を差し通す孔穴を穿ってあるもの：⑱・㉔、孔穴のないもの：㉕・㉖・㉘）を立て、隅柱間に横木（⑨・⑳）を差し通すか、横板（⑪・⑫・⑬）をわたし、その外側に５～６枚の側板（⑯・⑰・㉑・㉒・㉓）を立てかける井戸枠構造であったと考えられる。井戸内の堆積土６層上面から出土する枠材は殆んどが南側壁のものと推定される。残存する枠材の大きさは、四ツ割で先端を尖らせた基礎柱（⑩）が残存部全長113cm、幅4～８cm、厚さ２～5.5cmを計り、四角に面取りし横木用の孔穴を２つ穿ってある隅柱（㉔）では残存部全長65cm、一辺８cm×７cm、丸材で孔穴を１つ穿ってある隅柱（⑱）では残存部全長37.5cm、直径9.5cmである。横木には先端を四角に尖らせてあるものと、二ツ割のものとがあり、前者には角材であるもの（⑨：全長77cm、一辺4.5×７cmと⑳：全長67cm、一辺３×3.5cm）と

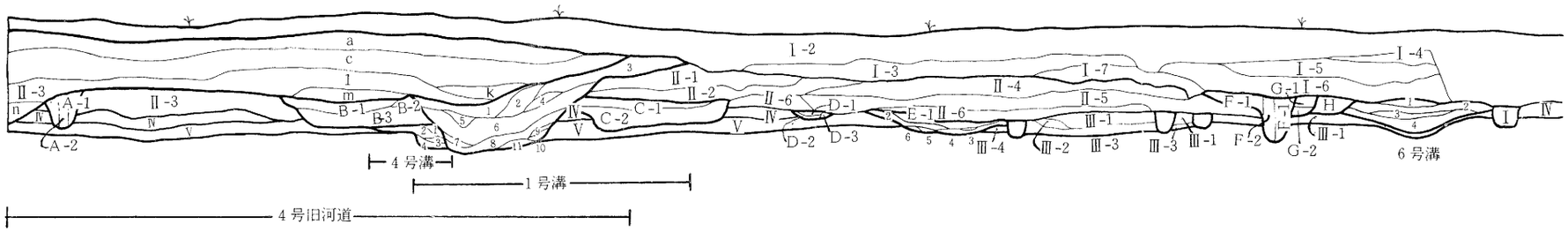

E12
E18
E24
N-18
N-12
N-6
N-O-S
W-O-E
E 6
N
0
5 m
5 号溝
9 号井戸
7 号井戸
8 号土壌
1 号溝
撹乱
28号土壌
4 号旧河道
4 号溝
2 号溝
10号井戸
1 号溝
3 号溝
24号土壌
20号土壌
25号土壌
26号土壌
1 号井戸
27号土壌
4 号土壌
30号土壌
29号土壌
31号土壌
6 号溝
23号土壌
16号井戸
22号土壌
18号土壌
3 号井戸
6 号井戸
19号土壌
2 号井戸
撹乱
4 号溝
8 号溝
11号土壌
7 号溝
5 号井戸
撹乱
1 号溝
4 号溝
撹乱
21号土壌
10号溝
13号土壌
1 号焼土
撹乱
15号井戸
17号井戸
12号土壌

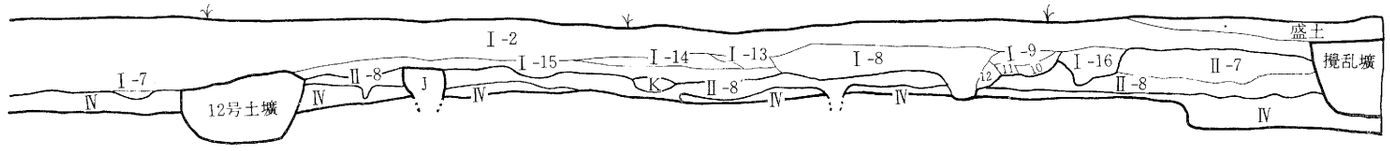
第３図　遺構配置図

トレンチ東壁

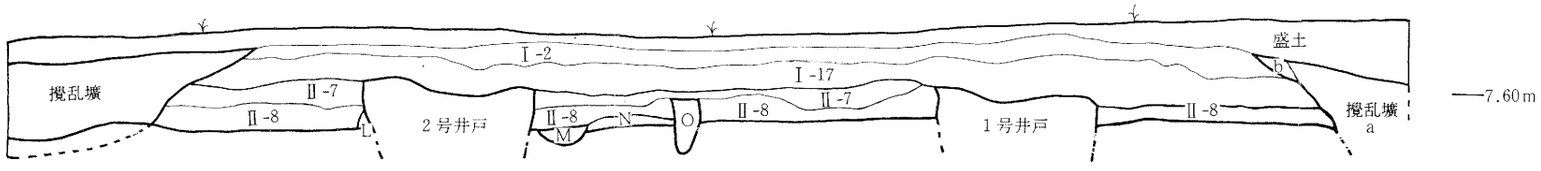


トレンチ南壁





トレンチ西壁



0 1 2 3 m

第4図　調査区土層図

第１表－１　調査区土層註記表

遺構	層位	土色	土性	その他
基本層位	Ⅰ-1	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	耕作土
	2	10YR5/2灰黄褐色	シルト	耕作土
	3	10YR3/2黒褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	4	10YR3/3暗褐色	シルト	
	5	10YR3/3暗褐色	シルト	炭化物をわずかに含む。
	6	10YR3/2黒褐色	シルト	
	7	10YR5/2灰黄褐色	シルト	
	8	2.5YR4/1黄灰色	シルト	炭化物を少量含む
	9	10YR4/4褐色	シルト	炭化物・酸化物を多く含む
	10	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物を多く含む
	11	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
	12	10YR3/2黒褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	13	10YR5/2灰黄褐色	シルト	マンガンを含む
	14	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	15	10YR3/2黒褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	16	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	17	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	Ⅱ-1	10YR5/2灰黄褐色	シルト	
	2	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	3	10YR3/1黒色	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む
	4	10YR3/2黒褐色	シルト	炭化物を多く含む
	5	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物・小礫を含む
	6	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物・小礫を含む
	7	10YR3/2黒褐色	シルト	炭化物を多く含む
	8	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物・小礫を多く含む
	Ⅲ-1	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質粘土	炭化物・パミスを少量含む
	2	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物を含む
	3	10YR4/4褐色	砂質シルト	炭化物・パミス・酸化鉄を含む
	4	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含み、土師器杯(破片)を含む
	Ⅳ	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	砂粒と酸化鉄を含む
	Ⅴ	2.5YR5/3黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
	Ⅵ	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む
1号旧河道		10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
2号旧河道	1	10YR3/3暗褐色	シルト	マンガンを斑状に含む
	2	10YR3/3暗褐色	シルト	1層より灰色味を帯びる
	3	10YR5/2灰黄褐色	シルト質粘土	
3号旧河道	1	10YR3/3暗褐色	シルト	
	2	10YR3/3暗褐色	シルト	暗褐色の砂を霜降状に含む
	3	10YR3/3暗褐色	シルト	砂をわずかに含む
	4	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	マンガンを含む
	5	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	砂を含む

遺構	層位	土色	土性	その他
4号旧河道	a	10YR3/3暗褐色	シルト	マンガンをわずかに含む
	b	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	マンガンを斑状に含む
	c	10YR4/4褐色	シルト質砂	マンガンを多く含む
	d	10YR4/4褐色	砂	
	e	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質粘土	
	f	10YR4/4褐色	シルト質砂	黒褐色のマンガンを含む
	g	10YR5/2灰黄褐色	シルト質砂	
	h	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
	i	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	
	j	欠落		
	k	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	
	l	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	
	m	10YR3/2黒褐色	シルト	炭化物を多く含む
	n	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
	o	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	p	10YR4/4褐色	シルト質粘土	
A	1	2.5YR4/1黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
	2	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む
B	1	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物・酸化物・明黄褐色粘土を含む
	2	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物を多く含む
	3	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	炭化物を多く含む
4号溝	1	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	炭化物・酸化鉄をわずかに含む
	2	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	粒子荒く、酸化鉄を少量含む
	3	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	
	4	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	炭化物を多く含む
1号溝	1	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	2	2.5Y5/2暗灰黄色	シルト	
	3	10YR3/1黒色	粘土質シルト	
	4	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
	5	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	6	2.5Y4/1黄灰色	粘土質シルト	酸化鉄・炭化物をわずかに含む
	7	10YR3/1黒色	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む
	8	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	
	9	2.5Y3/2黒褐色	粘土質シルト	
	10	2.5Y4/1黄灰色	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む
	11	2.5Y3/2黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
C	1	10YR5/2灰黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む(ピット内堆積土)
	2	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物を多く含む（ピット内柱痕跡）
D	1	10YR3/1黒褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
	2	10YR1/7黒色	シルト	炭化物を多量に含む
	3	10YR1/7黒色	シルト	炭化物を多量に含む

第１表－２　調査区土層註記表

遺構	層位	土色	土性	その他
E	1	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	炭化物を多く含む
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	酸化鉄・パミスを多く含む
	3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	多くの炭化物とパミスを含む
	4	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄・パミスを含む
	5	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	わずかの炭化物・酸化鉄とパミスを含む
	6	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	わずかの炭化物・酸化鉄とパミスを含む
F	1	10YR2/1 黒色	シルト	黄橙色粘土質シルトと炭化物をブロック状に含む
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
G	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を少量含む
	2	10YR2/1 黒褐色	シルト	酸化鉄を少量含む
H		2.5Y3/2 黒褐色	シルト	小礫・炭化物を含む
I		10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む(ピット内堆積土)
6号溝	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	灰黄色粘土質シルトと炭化物をブロック状に含む
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄と炭化物を少量含む
	3	10YR2/1 黒色	シルト	小礫を少量含む
	4	10YR1.7/1 黒色	粘土質シルト	褐色シルトをブロック状に含む
12号土壙		10YR2/1 黒色	シルト	灰黄褐色粘土質シルトと炭化物をブロック状に含む
J		10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	灰黄褐色粘土質シルトと酸化鉄をブロック状に含む
K		10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を多く含む
撹乱壙		10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
2号井戸		10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	明黄褐色粘土と小礫をブロック状に含む
L		10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物をわずかに含む
M		10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	小礫を少量含む(ピット内堆積土)
N		10YR3/4 暗褐色	シルト質砂	黒褐色シルトをブロック状に含む
O		10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を多く含む(ピット内堆積土)
撹乱壙	a	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	樹皮・竹片を含む
	b	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	
1号井戸		10YR5/2 灰黄褐色	シルト	明黄褐色粘土をブロック状に含み、小礫も含む

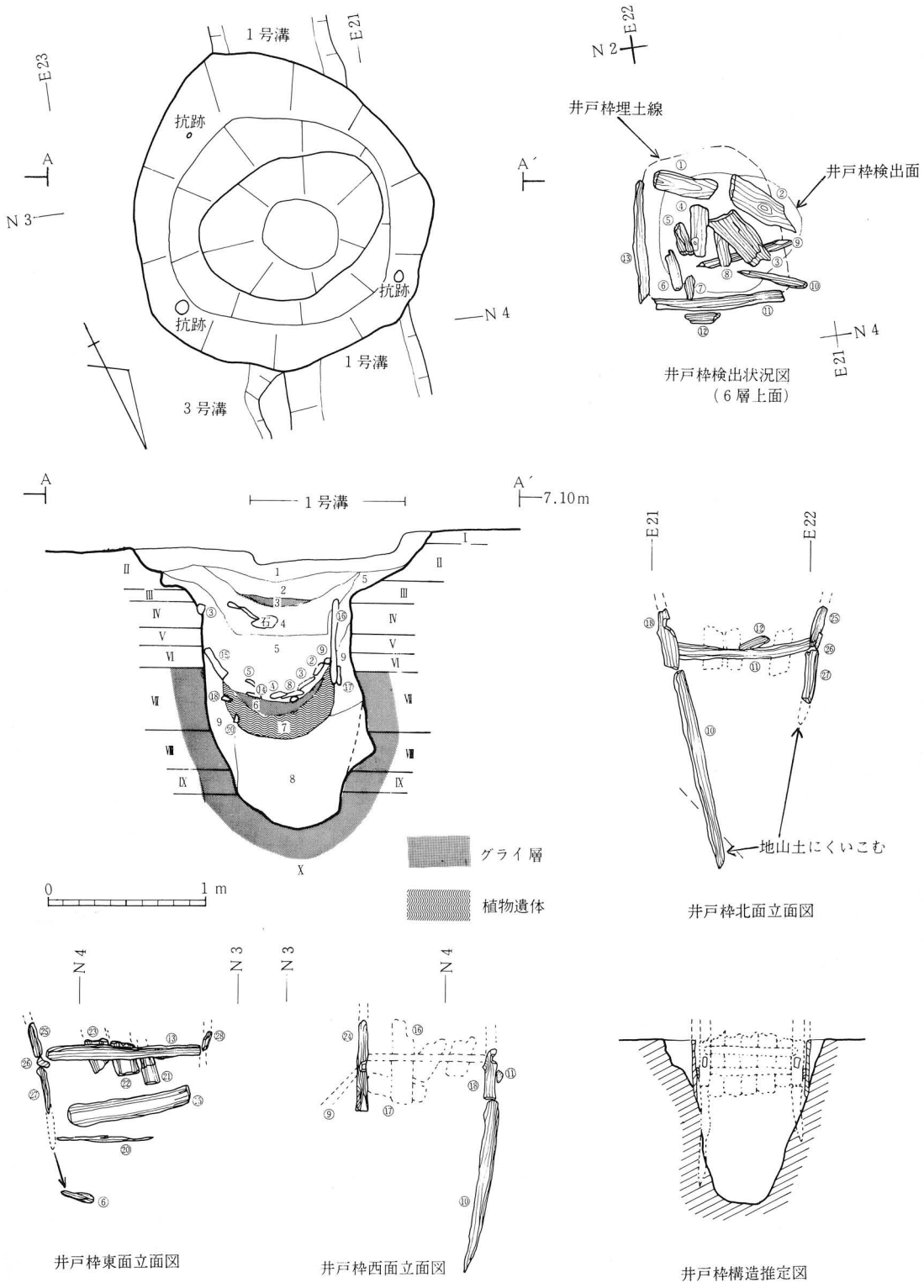
第２表　16号井戸土層註記表

	層位	土色	土性	その他
堆積土	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	粗砂を含む
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	パミスをわずかに含む
	3	10YR1.7/1 黒色	粘土質シルト	炭化灰土
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	5	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	植物種子(ウメ)を含む
	6	5Y3/1 黒色	シルト質粘土	炭化灰土
	7	10YR5/6 黄褐色	植物遺体	スゲか？(図版16)
	8	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	9	10YR3/1 黒色	シルト質粘土	掘方堆積土
	Ⅰ	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層位Ⅵ層に対応
	Ⅱ	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
	Ⅲ	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	Ⅳ	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	
	Ⅴ	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	
	Ⅵ	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質細砂	
	Ⅶ	2.5GY5/1 暗オリーブ灰色	細砂	
	Ⅷ	2.5Y5/3 オリーブ褐色	細砂	
	Ⅸ	2.5GY5/1 暗オリーブ灰色	細砂	
	Ⅹ	7.5Y5/1 灰色	粘土質細砂	流木・枯葉を多量に含む

井戸枠材

① 側板？(平板)
② 側板(平板)
③ 側板(平板)
④ 側板(平板)
⑤ 隅柱(四ッ割)
⑥ 隅柱(四ッ割)
⑦ 隅柱(四ッ割)
⑧ 側板(平板)
⑨ 横木(角材)
⑩ 基礎柱(四ッ割)
⑪ 横板(平板)
⑫ 横板(平板)
⑬ 横板(平板)
⑭ 側板(平板)
⑮ 側板？(平板)
⑯ 側板(平板)
⑰ 側板(平板)
⑱ 隅柱(丸材・丸穴テッ)
⑲ 横木(角材)
⑳ 横木(角材)
㉑ 側板(平板)
㉒ 側板(平板)
㉓ 側板(平板)
㉔ 隅柱(四角・丸穴テッ)
㉕ 隅柱
㉖ 隅柱
㉗ 基礎柱
㉘ 隅柱

丸材で全長76cm、直径4.5～６cmのものとがあり、後者では全長69cm、幅９～11cm、厚さ５～10cmのものと全長95cm、幅７～15cm、厚さ６～９cmの２本の遺存が良好である。横板では⑪：全長90cm、幅８～12cm、厚さ２～４cmと⑬：全長96cm、幅６～10cm、厚さ2.5～４cmが、側板では②：残存部全長49cm、幅14～18cm、厚さ２～３cm、③：残存部全長44cm、幅21～23cm、厚さ２～５cm、④：残存部全長34cm、幅11～15cm、厚さ４～５cm、⑯：残存部全長53cm、幅13～16cm、厚さ２～3.5cm、⑰：残存部全長46cm、幅15～18cm、厚さ2.5～４cmの５枚の遺存状況が良好である。これらの枠材の他に、①：残存部全長78cm、幅13～16cm、厚さ2.5～3.5cmと⑮：残存部全長91cm、幅14～15.5cm、厚さ３～3.5cmの２枚の用途不明な平板が出土している。井



第5図　16号井戸実測図

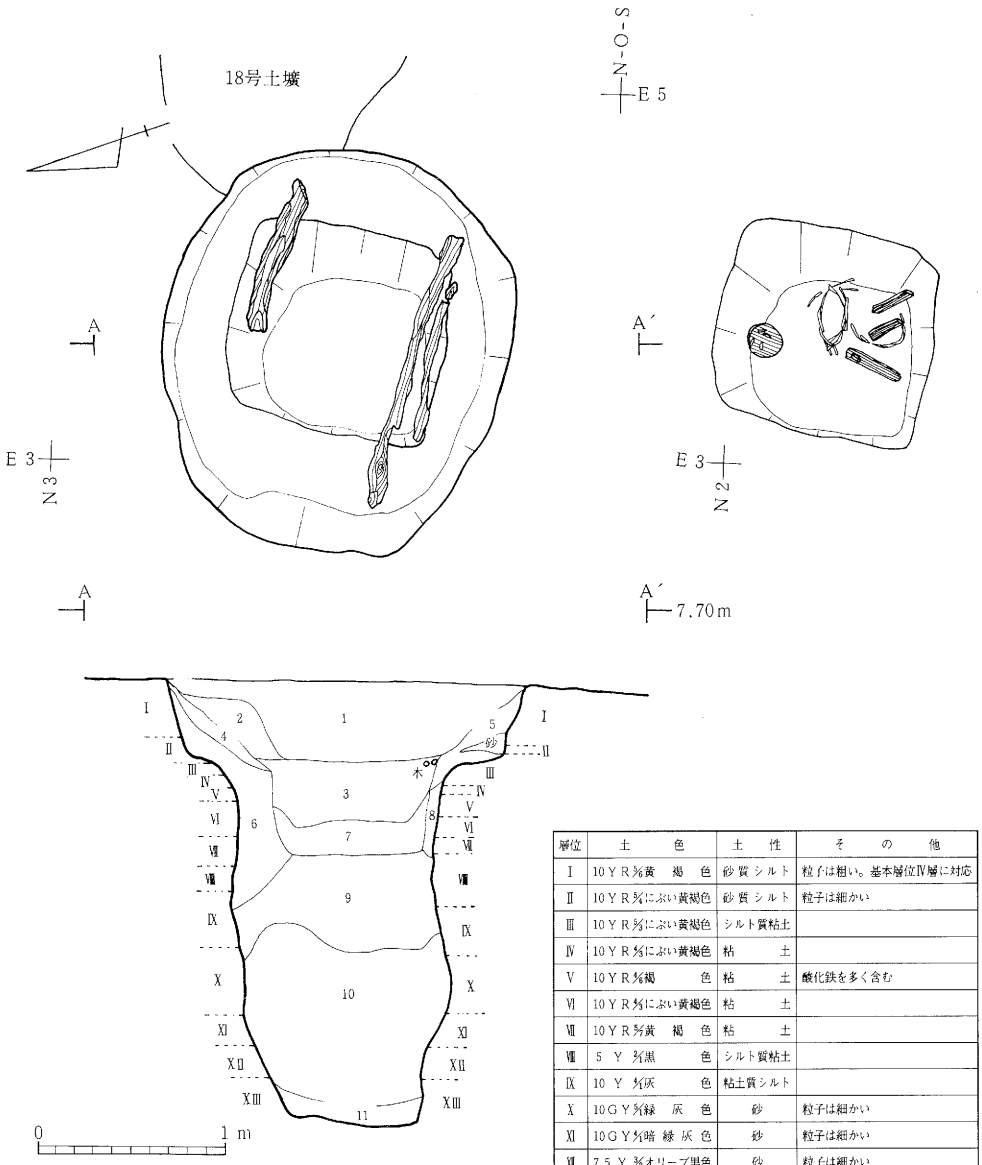
戸の掘り方は確認面で円形で、40cm程一段掘り込んだ後、さらに円形の垂直な掘り方となり、枠材より下部では不整形の素掘りとなり、最深部は断面形がV字状を呈す。堆積土1層下層より中世陶器の破片が3点出土した。4号溝を切り、1号溝に切られている。

Bタイプ　1号・3号・5号井戸の3基である。1号井戸は確認面で直径180cm程の平面形がほぼ円形と考えられる掘り方で、40～50cm程の深さで緩やかな円形から垂直な方形の掘り方にかわる。深さは180cm以上で、堆積土中に土師器片、須恵器片、木片を含む。調査区の西端に位置し、トレンチ壁の崩落の危険があったために井戸基底面を検出するに至らなかった。3号井戸は確認面での平面形が186×170cmの不整円形の掘り方で、深さ40cm程のところで段がつき、これより平面形が方形で壁面がほぼ垂直の掘り方にかわる。深さ236cm、底面は1辺65cmの方形である。堆積土の上部からは、段のところにかかるような状態で2本の丸材と木片が出土した。底部付近からは木桶の一部（側板8枚、底板1枚、竹製の箍2本。側板のうち1枚には取手をはめ込む柄孔があいている。）が散乱した状態で出土した他、中世陶器片が出土しており、18号土壙を切っている。5号井戸は確認面で直径約180cmの円形に近い掘り方の井戸で、深さ20cm程で掘り方の傾斜が一旦急から緩にかわり、深さ50cm付近で方形の垂直な掘り方となる。深さ198cm、底面は一辺約65cmの方形である。

Cタイプ　2号・6号・7号・10号・17号の5基の井戸である。平面形が円形または楕円形の掘り方で、直径は1.5mから2m程ある。深さ30～60cmで緩やかな段を有し、さらに直径0.6～1.1mの円筒形の素掘りとなるもので、深さが最も浅い17号井戸で112cm、深い2号井戸で194cmとさまざまである。底面直径も30cmから110cmと幅があるが、崩落のため壁土がえぐられたことを考えれば、30～60cm程であろう。7号井戸と10号井戸は特に湧水が激しかった。出土遺物は2号から土師器片、木片、6号から鉄製の小刀〈B001：第25図、図版15〉、聖宋元宝〈B101：第21図、図版15〉と銭名不明の古銭片〈B102：第21図、図版15〉、7号から中世陶器3点〈A301：第24図、図版14、A305：第24図、図版14、A306.：第24図、図版14〉、10号から中世陶器鉢〈A307：第24図、図版14〉と須恵器片、17号から劃花花弁文青磁碗〈A401：第25図、図版14〉の破片が出土している。

Dタイプ　9号井戸と15号井戸の2基である。9号井戸は確認面で直径130cm程のほぼ円形の掘り方のもので、急な傾きですぼまるが、崩落のために壁面が底部付近で少しえぐられた形になっており、深さ130cm、底面直径75cmを計る。湧水が激しく、土師器・須恵器・中世陶器の破片を出土し、5号溝を切っている。15号井戸は確認面で直径120cm程のほぼ円形の掘り方で底に近づくにしたがって徐々にすぼまっていくもので、深さ182cm、底部直径30cmを計り、土師器・中世陶器の破片を出土している。

3号井戸と6号井戸は18号土壙と重複関係があり、新旧関係は6号井戸が古く、3号井戸が

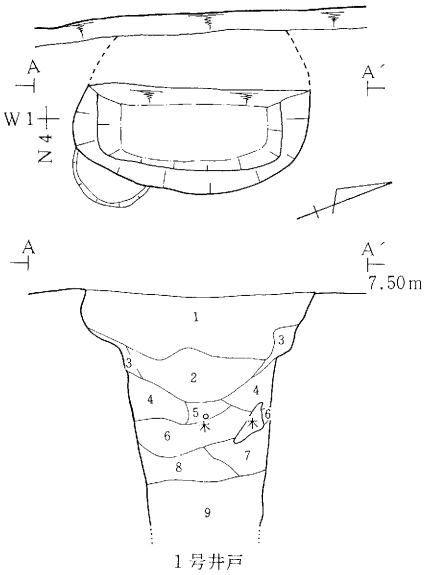


層位	土色	土性	その他
Ⅰ	10YR⅚黄褐色	砂質シルト	粒子は粗い。基本層位Ⅳ層に対応
Ⅱ	10YR⅔にぶい黄褐色	砂質シルト	粒子は細かい
Ⅲ	10YR⅔にぶい黄褐色	シルト質粘土	
Ⅳ	10YR⅔にぶい黄褐色	粘土	
Ⅴ	10YR⅚褐色	粘土	酸化鉄を多く含む
Ⅵ	10YR⅔にぶい黄褐色	粘土	
Ⅶ	10YR⅔黄褐色	粘土	
Ⅷ	5Y⅔黒色	シルト質粘土	
Ⅸ	10Y⅔灰色	粘土質シルト	
Ⅹ	10GY⅔緑灰色	砂	粒子は細かい
Ⅺ	10GY⅔暗緑灰色	砂	粒子は細かい
Ⅻ	7.5Y⅔オリーブ黒色	砂	粒子は細かい
ⅩⅢ	10GY⅔暗緑灰色	砂	粒子は粗い

3号井戸堆積土

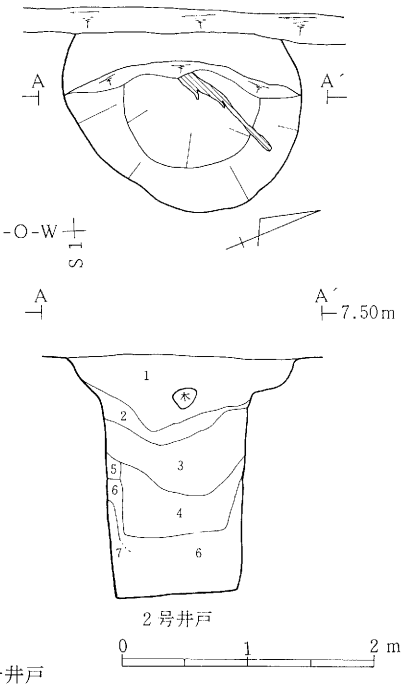
層位	土色	土性	その他
1	10YR⅔暗褐色	シルト質粘土	ブロック状の砂・粘土と、少量の酸化鉄を含む
2	10YR⅔黒褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む
3	10YR⅔黒褐色	粘土	酸化鉄をブロック状に多く含む
4	10YR⅔黒褐色	粘土	酸化鉄・砂をブロック状に含む
5	10YR⅔灰黄褐色	粘土質シルト	少量の酸化鉄とブロック状の砂を含む
6	10YR⅔黒褐色	シルト質粘土	上部にブロック状の酸化鉄を、下部にブロック状の砂を含む
7	5Y⅔オリーブ黒色	シルト質粘土	砂粒(径1～2mm)を全体に含む
8	10YR⅔黒褐色	粘土	
9	2.5YR⅔黒褐色	シルト質粘土	ブロック状の砂を含む
10	2.5Y⅔黒褐色	粘土質シルト	木の枝を含む
11	欠落		

第6図　3号井戸実測図



1号井戸

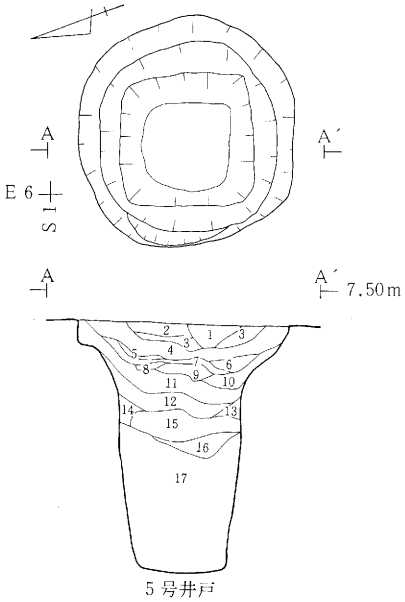
層位	土色	土性	その他
1	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	灰黄褐色シルト質粘土と暗褐色シルト質砂をブロック状に含み、酸化鉄も含む
2	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	灰黄褐色シルト質粘土と暗褐色シルト質砂をブロック状に含み、酸化鉄も含む
3	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	
4	10YR3/3黒褐色	砂質シルト	黒褐色粘土質シルトをすじ状に含み、酸化鉄も含む
5	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	
6	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質砂をブロック状に少量含む
7	5Y3/1オリーブ黒褐色	粘土質シルト	
8	5Y3/1オリーブ黒褐色	粘土質シルト	
9	7.5Y3/2オリーブ黒褐色	砂質シルト	粒子は粗い



2号井戸

2号井戸

層位	土色	土性	その他
1	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄・ブロック状の砂(径2～5cm黄褐色)を含む
2	10YR3/2黒褐色	粘土	酸化鉄を少量含む
3	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含み、ブロック状に砂を含む
4	2.5Y3/2黒褐色	粘土質シルト	細かな粒の砂を含む
5	2.5Y3/3暗灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
6	2.5GY3/1オリーブ灰色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
7	7.5GY3/1暗緑灰色	シルト	粗い粒の砂を含む



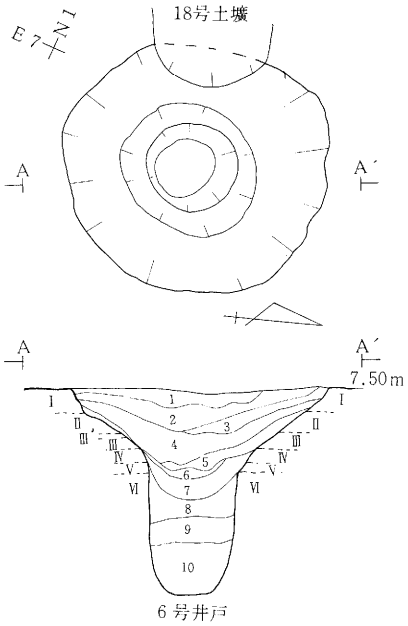
5号井戸

0 1 2 m

5号井戸

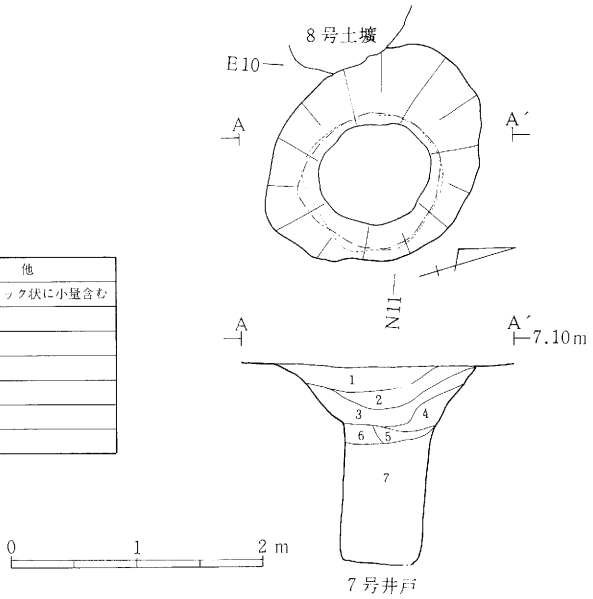
層位	土色	土性	その他
1	10YR3/3黒褐色	シルト	明黄褐色シルトの灰をブロック状に、酸化鉄を含む
2	10YR3/3黒褐色	シルト	酸化鉄とブロック状の灰を含む
3	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	1、2層より多くブロック状の灰を含み、少量の酸化鉄を含む
4	10YR3/3黒褐色	シルト	褐色の砂・ブロック状の灰・酸化鉄を含む
5	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
6	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む
7	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含み、褐色の砂と灰を少量含む
8	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	灰を多く含む
9	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多く含む
10	10YR3/2灰黄褐色	シルト質粘土	灰・酸化鉄をブロック状に含む
11	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄・砂を少量含む
12	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	11層より多く酸化鉄・砂を含む
13	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	12層より多く砂を含み、灰・酸化鉄を少量含む
14	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	灰・酸化鉄・砂をブロック状に含む
15	2.5Y3/1黒褐色	シルト質粘土	砂をブロック状に含む
16	5Y3/1灰褐色	シルト質砂	黒褐色粘土質シルトと暗緑灰色粘土質シルトをブロック状に含む
17	3.5Y3/1黒褐色	シルト質粘土	暗緑灰色粘土質シルトをブロック状に含む

第7図　井戸跡実測図(1)



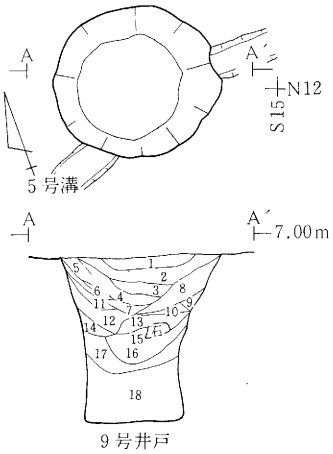
6号井戸

層位	土色	土性	その他
1	10YR3/3黒褐色	シルト	焼土・炭化物・灰を含む
2	10YR3/3黒褐色	砂質粘土	白色パミスを多く含み褐色土ブロック混入
3	10YR3/3暗褐色	砂質粘土	白色パミスを少量含み褐色砂のブロック多く混入
4	10YR3/3黒褐色	砂質粘土	パミスを少量含み、オリーブ褐色の小ブロック
5	10YR3/3黒褐色	粘土	パミスをわずかに含む
6	10YR7/1黒色	シルト	炭化物を多量に含む
7	10YR3/3黒褐色	砂質粘土	
8	10YR3/3黒褐色	砂	粘土混入
9	10YR3/2黒褐色	粘土質砂	
10	5GY3/1オリーブ黒色	粘土	
Ⅰ	10YR3/3暗褐色	砂	基本層位Ⅳ層に対応
Ⅱ	10YR3/4暗褐色	粘土質砂	
Ⅲ	10YR5/6黄褐色	粘土	
Ⅲ′	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	
Ⅳ	10YR3/2黒褐色	粘土	
Ⅴ	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土	
Ⅵ	10YR3/2黒褐色	粘土	



7号井戸

層位	土色	土性	その他
1	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄・炭を多量に、砂をブロック状に小量含む
2	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄・炭を少量含む
3	2.5Y 3/2黒褐色	シルト質粘土	砂をブロック状に含む
4	7.5YR5/4褐色	砂質シルト	
5	5Y3/2オリーブ黒色	シルト質粘土	
6	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	炭をわずかに含む
7	7.5GY5/1緑灰色	砂質シルト	



9号井戸

層位	土色	土性	その他
1	10YR3/3暗褐色	シルト	
2	10YR3/2黒褐色	シルト	
3	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
4	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
5	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	酸化鉄をわずかに含む
6	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	酸化鉄を多く含む
7	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
8	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	灰と酸化鉄をブロック状に含む
9	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	
10	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
11	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄をわずかに含む
12	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	
13	2.5Y 5/1黄灰褐色	粘土質シルト	灰色のシルト質粘土と酸化鉄をブロック状に含む
14	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
15	5Y 5/1灰色	シルト質粘土	酸化鉄を含む
16	10GY5/1暗緑色	シルト質粘土	グライ化
17	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	グライ化
18	10YR5/1褐灰色	シルト質粘土	

第8図　井戸跡実測図(2)

新しい。したがって、円形の掘り方の中に方形の掘り方をもつBタイプよりも円形の素掘りのCタイプの方が古式であると考えられる。中世陶器や青磁の出土があることや、近世以降の遺物を共伴しないことから、11基の井戸跡は中世のものと考えられる。

第3表　井戸跡一覧表

No.	平面形	タイプ	大きさ(cm)	深さ(cm)	その他
1	円　形	B	184×128以上	180以上	土師器・須恵器・木片
2	円　形	C	188×144以上	194	土師器・木片
3	円　形	B	214×182	236	木桶・丸材・木片・中世陶器。18号土壙を切っている。
5	円　形	B	186×170	198	
6	円　形	C	212×202	162	須恵器・鉄製小刀・聖宋元宝。18号土壙に切られている。
7	楕円形	C	194×154	158	土師器・須恵器・中世陶器(甕・鉢)。8号土壙に切られている。
9	円　形	D	134×122	130	土師器・須恵器・中世陶器。5号溝を切っている。
10	楕円形	C	202×172	148	須恵器・中世陶器(鉢)。2号溝を切っている。
15	円　形	D	120×112	182	土師器・中世陶器
16	円　形	A	206×190	194	井戸枠・中世陶器。4号溝を切り、1号溝に切られている。
17	円　形	C	176×154	112	青磁碗

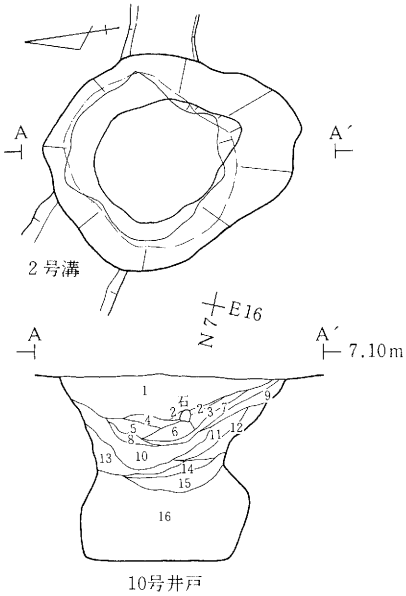
2．土　　壙

調査区全域より総数19基の土壙が検出された。うち12基は調査区の西側微高地に位置する。

4号土壙　調査区中央部のやや北寄りに検出され、確認面での平面形は楕円形で、大きさは上面で南北146cm、東西114cmを計る。深さは確認面より22～30cmである。断面形は緩やかな立ち上がりの舟底形を呈するが、南壁のみ急に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。堆積土はベルト位置で5層に分けられ、黒褐色の砂質シルトと粘土質シルトが大部分を占める。土壙のほぼ½が9号溝を切っている。出土遺物には土師器の坏・甕の破片、須恵器の体部片、中世陶器片がある。

8号土壙　調査区北寄りに検出され、西側半分は調査区外に延びている。確認面での平面形は歪んだ楕円形と考えられ、大きさは上面で南北122cm、東西82cmを計る。底面北寄りに深さ2～4cmほどの凹みをもつ。深さは確認面より20～25cm程であるが、調査区トレンチ壁の観察によれば、最深96cmを計り、断面形は摺鉢形で堆積土は5層に分かれる。土壙の東側を7号井戸に、南側を1号溝に切られる。

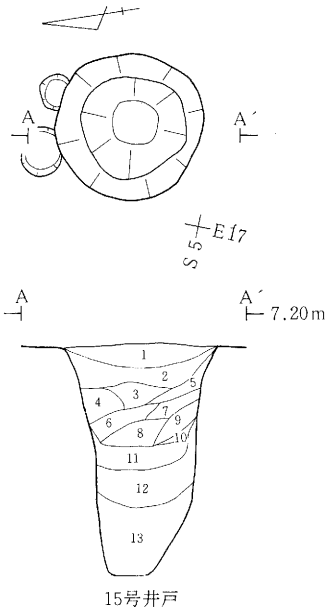
11号土壙　調査区中央部南寄りに検出され、確認面での平面形は直径110cmの円形である。



10号井戸

10号井戸

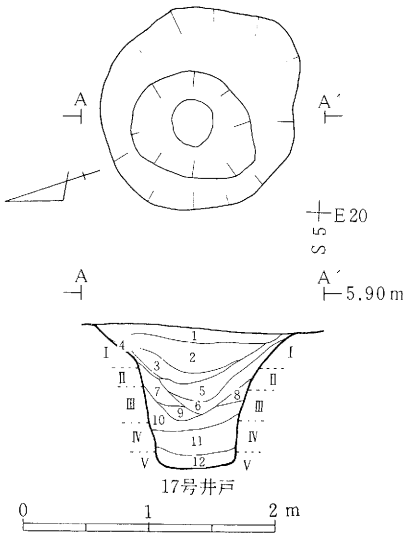
層位	土色	土性	その他
1	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	炭・焼土をわずかに含む
2	10BG3/1青黒色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む
3	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	炭・焼土をわずかに含む
4	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	炭・焼土をわずかに含む
5	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	炭・焼土を少量含む
6	7.5YR3/1黒色	シルト質粘土	全体に炭が混入し、炭・小量の焼土を含む
7	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	砂をブロック状に含む
8	2.5YR4/6赤褐色		焼土層。炭を少量含む
9	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	炭をわずかに含む
10	2.5Y3/1黒褐色	シルト質粘土	炭をわずかに含む
11	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	
12	2.5Y3/3黒褐色	シルト質粘土	
13	7.5YR4/1褐灰色	シルト質粘土	
14	10YR3/3黒褐色	シルト質粘土	炭をブロック状に少量含む
15	2.5Y3/3暗オリーブ色	シルト質粘土	砂をブロック状に少量含む
16	5GY3/1オリーブ灰色	砂質シルト	



15号井戸

15号井戸

層位	土色	土色	その他
1	10YR3/3黒褐色	シルト	炭を含む
2	10YR3/1黒褐色	シルト	炭・酸化鉄を含む
3	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	炭・酸化鉄を含む
4	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	炭・酸化鉄を少量含む
5	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
6	10YR3/1黒色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
7	10YR3/1黒色	粘土質シルト	酸化鉄・砂をブロック状に含む
8	10YR3/1黒色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
9	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
10	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
11	2.5Y3/1黒褐色	シルト質粘土	緑灰色シルト質粘土をブロック状に含む
12	5Y3/1オリーブ黒色	シルト質粘土	
13	7.5Y3/1オリーブ黒色	シルト質粘土	緑灰色シルト質粘土をブロック状に含む

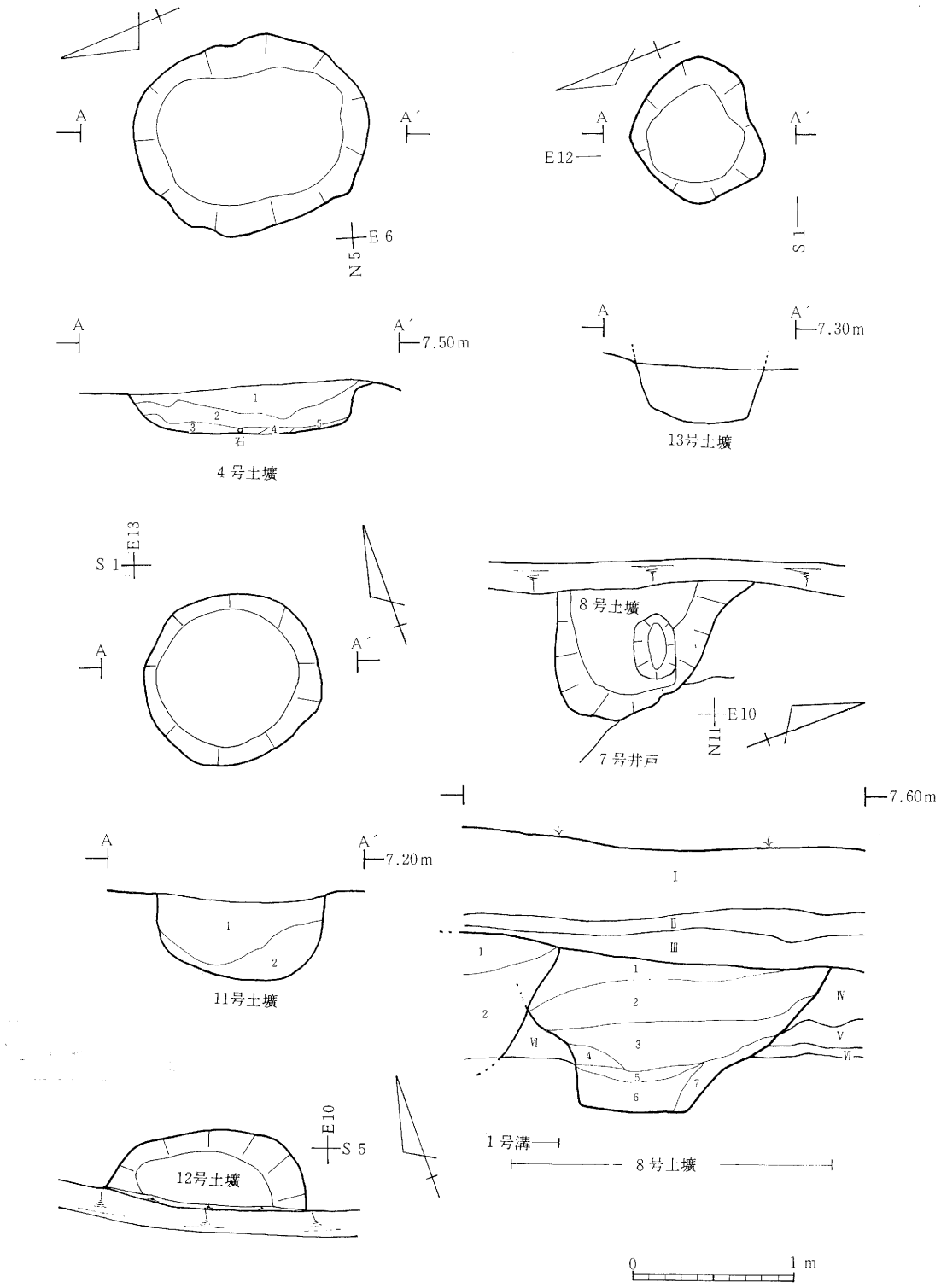


17号井戸

17号井戸

層位	土色	土性	その他
1	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	炭と粗い粒子の砂を含む(基本層位Ⅴ層に対応)
2	10YR3/3黒褐色	シルト	炭・酸化鉄を含む
3	10YR4/4灰黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色砂質シルトをブロック状に含む
4	10YR3/1黒色	粘土質シルト	炭を多く含む
5	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄・炭を多量に含む
6	5Y3/1オリーブ黒色	粘土質シルト	暗灰色シルト質粘土をブロック状に含む
7	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
8	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	砂をブロック状に含む
9	10Y3/1オリーブ黒色	シルト質粘土	
10	10Y3/1オリーブ黒色	シルト質粘土	砂をブロック状に含む
11	10Y3/1灰色	粘土質シルト	砂をブロック状に含む
12	10Y3/1オリーブ黒色	粘土質シルト	
Ⅰ	10YR3/3暗褐色	シルト	酸化鉄を多く含む
Ⅱ	10YR4/4灰黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色シルト質粘土・酸化鉄を含む
Ⅲ	10YR3/1黒色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
Ⅳ	2.5GY3/1暗オリーブ灰色	シルト質粘土	
Ⅴ	2.5GY3/1暗オリーブ灰色	シルト質砂	

第9図　井戸跡実測図(3)


A
A′
E 6
N 5
7.50m
4 号土壙
E12
S 1
7.30m
13号土壙
S 1
E13
8 号土壙
E10
N11
7 号井戸
7.60m
7.20m
11号土壙
12号土壙
E10
S 5
1 号溝
8 号土壙
0
1 m

第10図　土壙実測図（1）

第４表　土壙土層註記表（1）

遺　構	層位	土　　色	土　　性	そ　　の　　他
４号土壙	1	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	砂質シルト	小礫をわずかに含む
	2	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	粘土質シルト	灰をブロック状に少量含む
	3	10ＹＲ3/3　暗　褐　色	シ　ル　ト	灰を含む
	4	10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	
	5	10ＹＲ3/2　灰黄褐色	砂質シルト	
13号土壙		7.5ＹＲ2/1　黒　　色	砂質シルト	酸化鉄を多く含み、焼土粒、木炭も含む
８号土壙	1	7.5ＹＲ3/3　暗　褐　色	シ　ル　ト	砂粒を少量含む
	2	10ＹＲ3/3　黒　褐　色	粘土質シルト	
	3	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	粘土質シルト	
	4	7.5ＹＲ2/1　黒　　色	シルト質粘土	
	5	10ＹＲ2/1　黒　　色	シルト質粘土	シルト化した炭化物を含む
	6	10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	５層との間に少量パミスを有する
	7	7.5ＹＲ3/1　黒　褐　色	砂質粘土	
11号土壙	1	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	シ　ル　ト	灰黄褐色シルト質粘土と酸化鉄をブロック状に含む
	2	10ＹＲ3/2　黒　褐　色	シ　ル　ト	灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に多く含む
12号土壙	註記は第１表－２調査区土層註記表を参照			

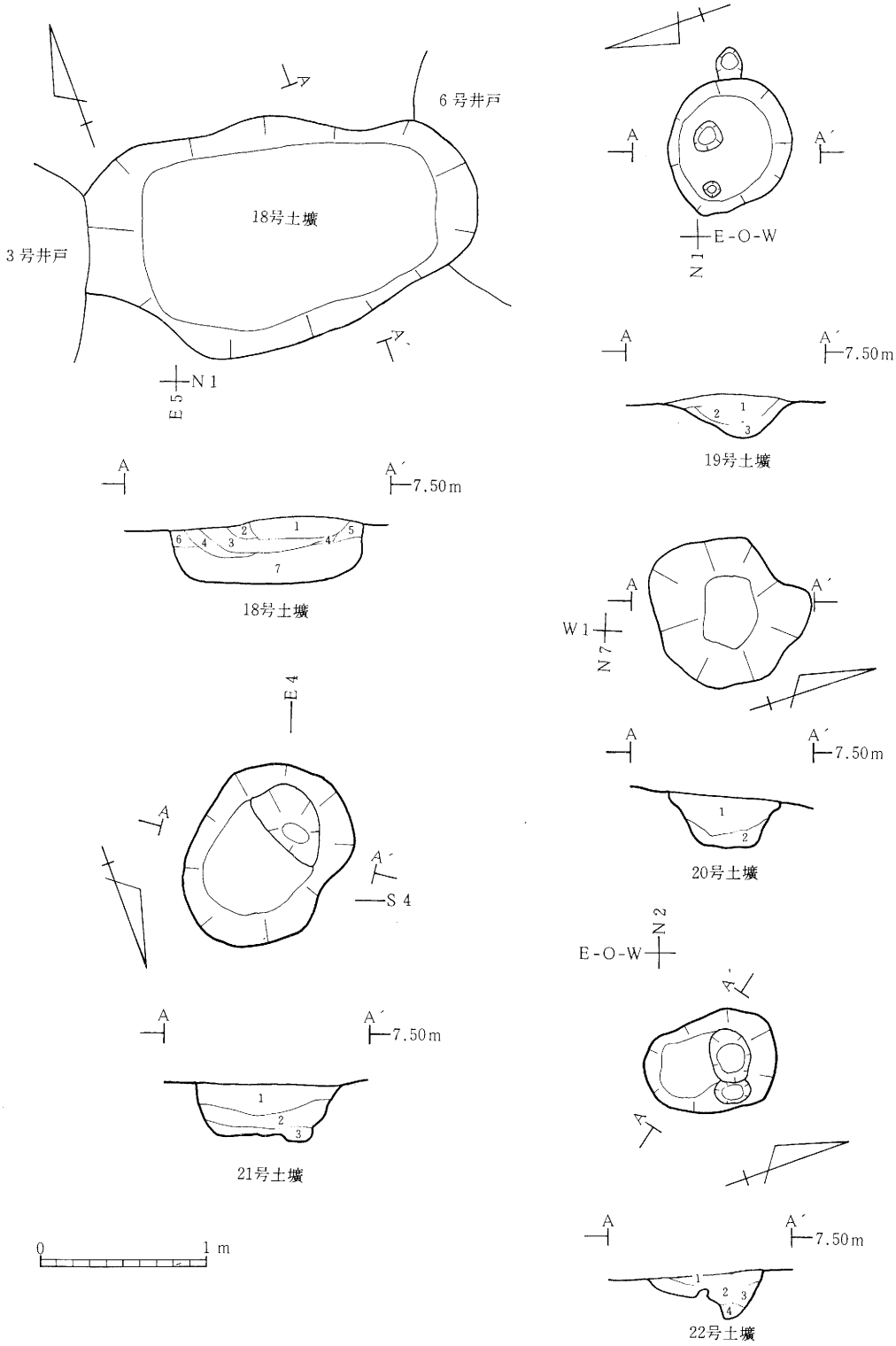
深さは確認面より38～48cmで、床面は西側が高く、東側に傾斜している。断面形は舟底形を呈し、壁面は急に立ち上がる。堆積土は黒褐色シルトでその中にブロック状の灰黄褐色粘土を含み、人為的に一時に埋められたものと考えられる。

12号土壙　調査区の南側に検出され、南側半分は調査区外に延びている。確認面での平面形は隅丸方形と考えられ、大きさは確認面で東西126cm、南北50cm程ある。深さは確認面より24～32cmを計るが、トレンチ壁の観察によれば46～66cmとなり、上端が東側で低く西側で高い舟底形の断面形を呈する。堆積土は黒色シルトでブロック状の灰黄褐色粘土質シルトを含み、人為的に一時に埋められたものと考えられる。

18号土壙　調査区中央部に検出され、６号井戸を切り、３号井戸に切られている。確認面での平面形は歪んだ楕円形で大きさは上面で長軸234cm、短軸136cmを計る。深さは確認面より30～40cmで、断面形は急な立ち上がりの舟底形を呈し、堆積土はベルト位置で７層に分けられるが、基本的には黒褐色シルト層（１層～６層）と黒色粘土質シルト層（７層）に大別され、どちらも炭化物を多く含む。遺物は、３層中より青磁碗の破片が２点〈Ａ404：第25図、図版14、Ａ405：第25図、図版14〉出土した。

19号土壙　調査区西側中央に検出された。確認面で平面形は不整方形で、大きさは上面で東西86cm、南北72cm、深さは確認面より10～26cmで、底面に２個のピット（深さ５～９cm）を検出した。断面形は擂鉢形を呈し、堆積土は３層に分かれる。遺物は１層上面で須恵器坏〈Ａ212：第23図〉を出土した。

27号土壙　調査区中央部北寄りに検出された。確認面で平面形は隅丸長方形で、大きさは上


6号井戸
18号土壙
3号井戸
N 1
E 5
A
A´
7.50m
18号土壙
E-O-W
N 1
19号土壙
W 1
N 7
20号土壙
E 4
S 4
21号土壙
N 2
E-O-W
22号土壙
0
1 m

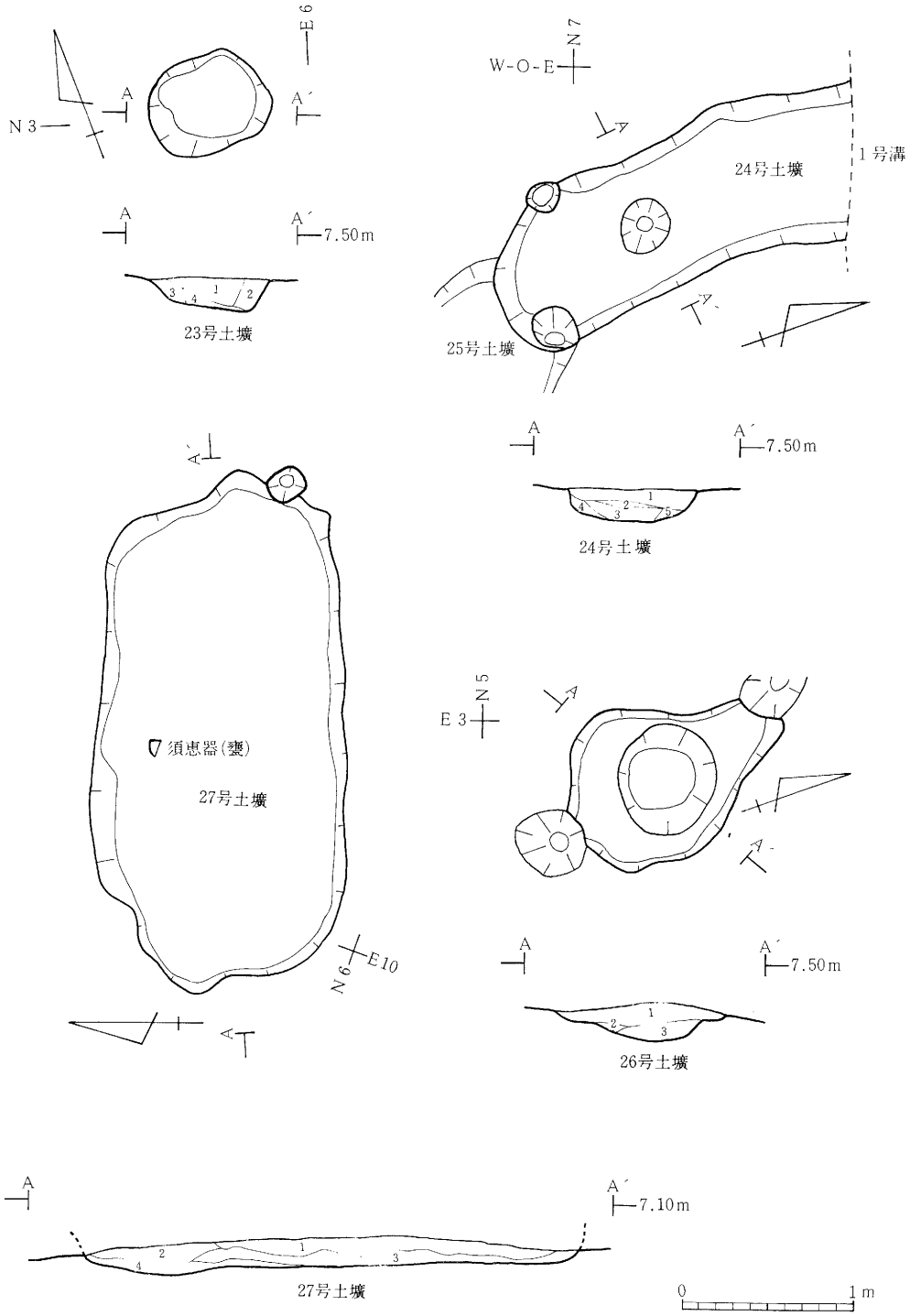
第11図　土壙実測図(2)

第5表　土壙土層註記表(2)

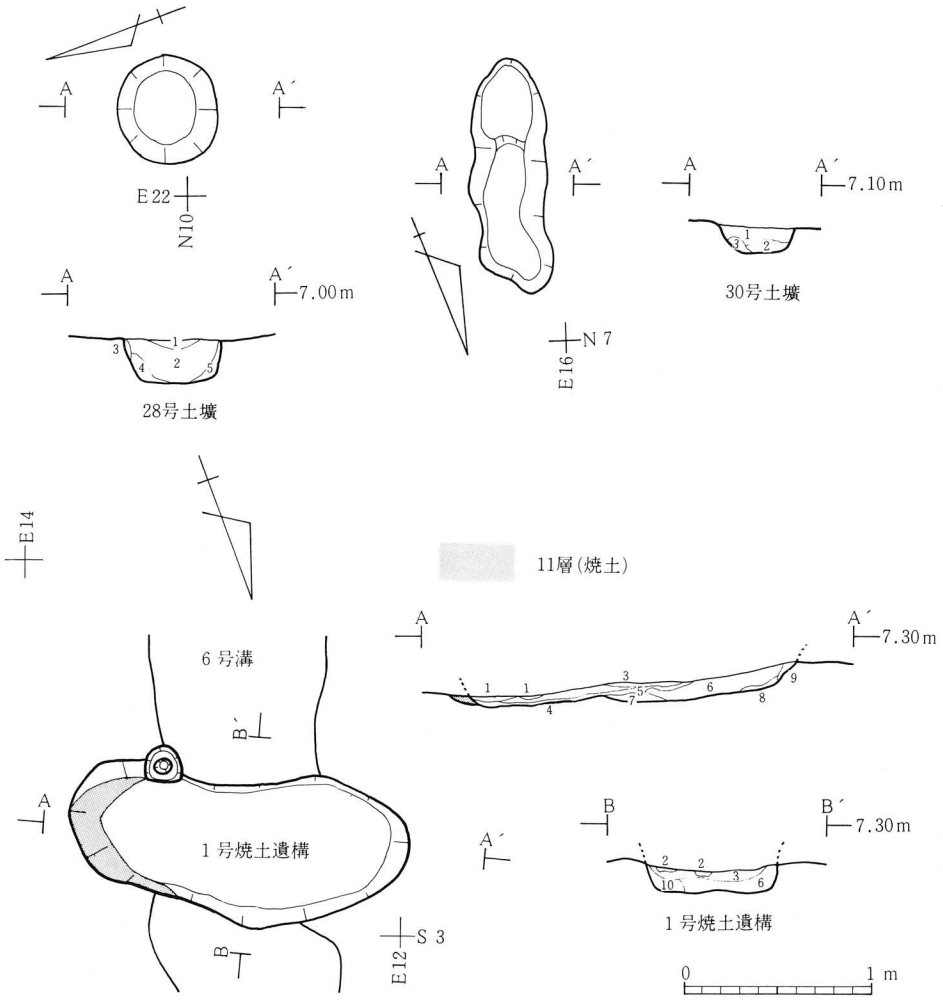
遺　構	層位	土　色	土　性	そ　の　他
18号土壙	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭を含む
	2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭を含む
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	黒褐色シルトをブロック状に含む
	5	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭を含む
	6	10YR3/1 黒褐色	シルト	
	7	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	炭を多く含む
19号土壙	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	砂をブロック状に少量含む
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭を含む
	3	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
20号土壙	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	全体に砂粒(径2～4㎜)と少量の炭を含む
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	7.5YR4/4褐色の砂質シルトをブロック状に含む
21号土壙	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭を少量含む
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭をわずかに含む
	3	10YR4/6 褐色	砂質シルト	
22号土壙	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	3	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	
	4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
23号土壙	1	10YR2/1 黒色	シルト	炭・酸化鉄をわずかに含む
	2	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	ブロック状の黒色シルトと礫を含む
	3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	礫を含む
	4	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色シルトをブロック状に含む
24号土壙	1	10YR3/2 暗褐色	シルト	
	2	10YR3/3 褐色	シルト	黄褐色シルトをブロック状に含む
	3	10YR3/2 暗褐色	シルト	
	4	10YR3/2 暗褐色	シルト	明黄褐色シルトをブロック状に含む
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
26号土壙	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭を少量含む
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	炭を少量含む
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	ブロック状の灰黄褐色シルトと少量の焼土・炭を含む
27号土壙	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	粗い粒子で酸化鉄とわずかに炭化物を含む
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・酸化鉄を含む
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄・砂粒を含む
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄・炭化物を多く含む

面で292×140㎝、深さは確認面より4～26㎝で、西側の壁は削られて遺存状態が悪い。断面形は舟底形でやや急な立ち上がりを呈す。確認面の上面には灰黄褐色粘土質シルトの拡がりが認められた。遺物は1層下面より須恵器甕〈A201：第24図〉が出土した。

以上、出土遺物に中世陶器が含まれる4号土壙と18号土壙は中世に属し、平安時代の溝跡である6号溝に切られる27号土壙は平安時代の遺構と考えられるが、その他の土壙については、出土遺物が乏しく時期が判然としないが、他遺構との関連などからみて、中世に属するものと考えられる。


E 6
N 3
A
A´
7.50m
23号土壙
W-O-E
N 7
24号土壙
1 号溝
25号土壙
24号土壙
須恵器(甕)
27号土壙
N 6
E 10
N 5
E 3
26号土壙
7.10m
27号土壙
0
1 m

第12図　土壙実測図(3)



第13図　28・30号土壙、1号焼土遺構実測図

3．焼土遺構

調査区南辺中央部に位置し、確認面で平面形が足跡形で、最大幅182cm、最小幅62cmの土壙である。断面形は逆台形で深さ12cmを計り、堆積土は各層とも焼土粒を含み、11層はオリーブ色の焼土粒（径5～15mm）と木炭を含む焼土層である。堆積土中よりロクロ使用痕のある土師器・坏の口縁部と底部の破片を出土しているが、平安時代に属する6号溝を切っており、時期

第6表　28号・30号土壙、1号焼土遺構土層註記表

遺構	層位	土色	土性	その他
28号土壙	1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	パミスを少量含む
	2	10YR2/3 黒褐色	砂質粘土	パミスを多く含む
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	4	7.5YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	
	5	10YR3/1 黒褐色	粘土	
30号土壙	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	白い砂粒、酸化鉄を多く含む
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄をわずかに含む
	3	10YR5/4 褐色	砂質粘土	白い砂粒、酸化鉄を含む
1号焼土遺構	1	7.5YR3/1 黒褐色	シルト	灰・焼土粒を含む
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土粒を少量含む
	3	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土粒を含む
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物・灰・焼土粒を多量に含む
	5	10YR1.7/1 黒色	シルト	炭化物を多量に含む
	6	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む
	7	10YR1.7/1 黒色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む
	8	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土粒を少量含む
	9	10YR4/6 褐色	シルト	粒子が荒い
	10	10YR1.7/1 黒色	粘土質シルト	炭化物を多く含み、細粒子の焼土を含む
	11	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土。10YR5/4オリーブ色の焼土粒(径5～15㎜)と木炭を含む
	地山	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	粒子が荒い（基本層位Ⅴ層に対応）

第7表　土壙一覧表

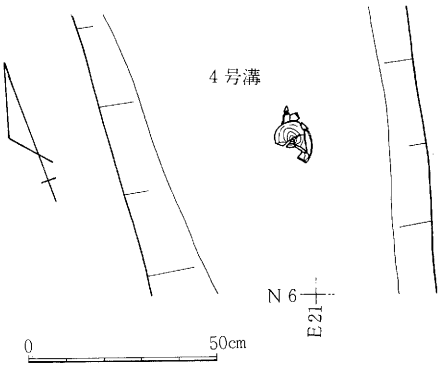
No.	平面形	断面形	大きさ(cm)	深さ(cm)	その他
4	楕円形	舟底形	146×114	30	9号溝を切る。土師器(坏・甕)、須恵器、中世陶器片
8	不整楕円形	逆台形	122×82以上	96	7号井戸・1号溝に切られる。
11	円形	舟底形	110×110	48	ピットに切られる。
12	隅丸方形	舟底形	126×50以上	66	
13	不整方形	逆台形	92×66	34	10号溝を切る。
18	不整楕円形	舟底形	234×136	40	青磁(碗)破片。3号井戸に切られ、6号井戸を切る。
19	不整円形	摺鉢形	86×72	26	須恵器(坏)
20	不整方形	逆台形	86×82	30	9号溝を切る。
21	不整楕円形	逆台形	116×82	34	
22	不整楕円形	舟底形	80×56	28	
23	隅丸方形	舟底形	68×56	18	
24	隅丸長方形	舟底形	78×220以上	20	1号溝に切られ、25号土壙・9号溝を切る。
25	隅丸長方形	逆台形	190×98	4	24号土壙・26号土壙に切られ、9号溝を切る。
26	不整円形	舟底形	126×98	22	ピットに切られ、25号土壙・9号溝を切る。
27	隅丸長方形	舟底形	292×140	16	6号溝に切られ、9号溝を切る。須恵器(甕)
28	円形	逆台形	58×52	22	
29	不整楕円形	逆台形	100×30	10	
30	不整楕円形	舟底形	126×42	14	
31	不整楕円形	逆台形	32×16	6	

性格ともに判然としない。

第14図　掘立柱建物跡・掘立柱列・溝跡平面図

4．溝　　跡

溝跡は調査区内より合計10条検出されたが、他遺構との重複ないし、調査区外に延びているためにその全体を知り得るものはない。



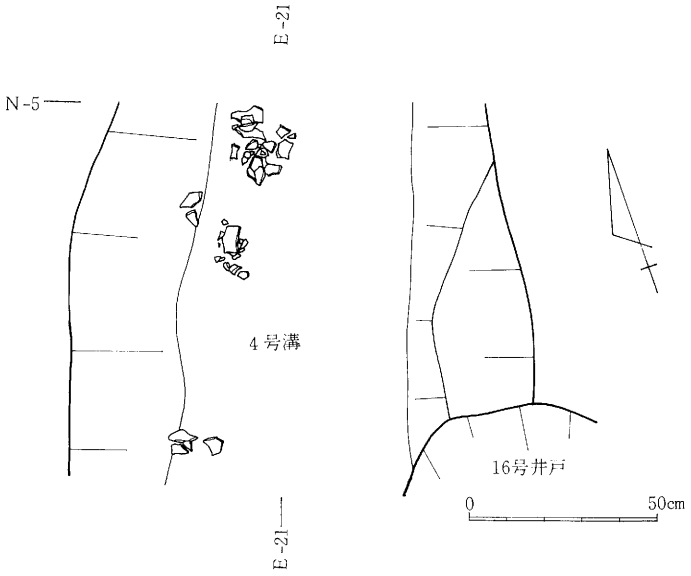
第15図　土師質の土器坏Ａ101出土状況図

１号溝　調査区の北側で東西方向、東側で屈曲して南に延びる溝で、確認面で上端幅80cm、底幅70cm、深さ20cm程度、断面形が逆台形の急な立ち上がりの壁をもつ。南北方向部分では２層の堆積層（上層は褐色砂質シルト層、下層は暗褐色ないし黒褐色粘土質シルト層）に分かれ植物遺体を多く含み、須恵器坏〈Ａ209：第23図、図版13〉、中世陶器片を出土している。２号溝、４号溝、８号土壙、16号土壙を切っている。

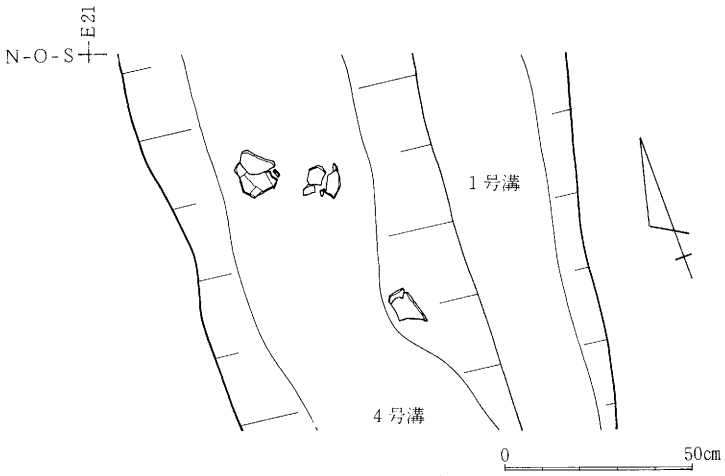
２号溝　調査区をＮ－12ラインに沿って東西方向に延びる溝で、確認面で上端幅70cm、底幅70cm、深さ７cm程度、断面形が逆台形である。１号溝、10号井戸、４号旧河道に切られ、３号溝、４号溝を切っている。

３号溝　１号溝の東側に平行して南北方向に延びる溝であるが、残存総長約3.3ｍと短く、確認面で上端幅50cm、底幅50cm、深さ10cm程度、断面形が逆台形である。２号溝に切られている。

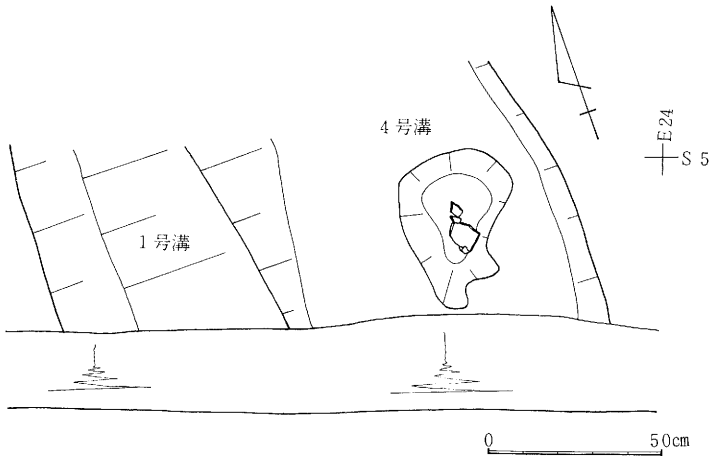
４号溝　１号溝の屈曲点の東約１ｍの地点から南北方向に１号溝とほぼ重複して検出された溝で、確認面で上端幅60cm、底幅40cm、深さ20cm程度、断面形が逆台形である。16号井戸跡の北約80cmの底面より土師器甕〈Ａ004:第16・22図、図版12〉を調査区南辺の底辺より表杉ノ入式の土師器坏を２点〈Ａ009・Ａ010：第17図・23図〉と同坏〈Ａ011：第18・23図〉、倒立の土師質の土器〈Ａ



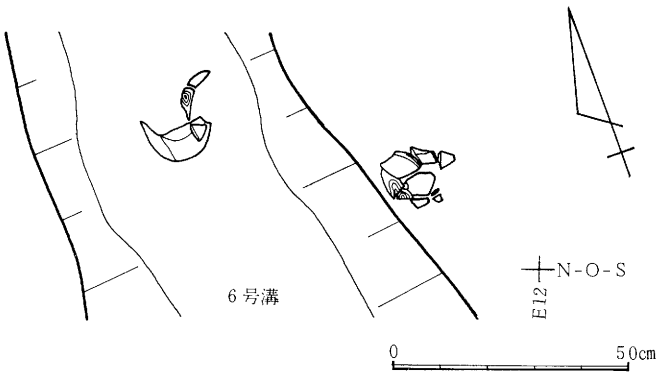
第16図　土師器甕Ａ004出土状況図



第17図　土師器坏Ａ009・Ａ010（南側）出土状況図



第18図　土師器坏Ａ001出土状況図

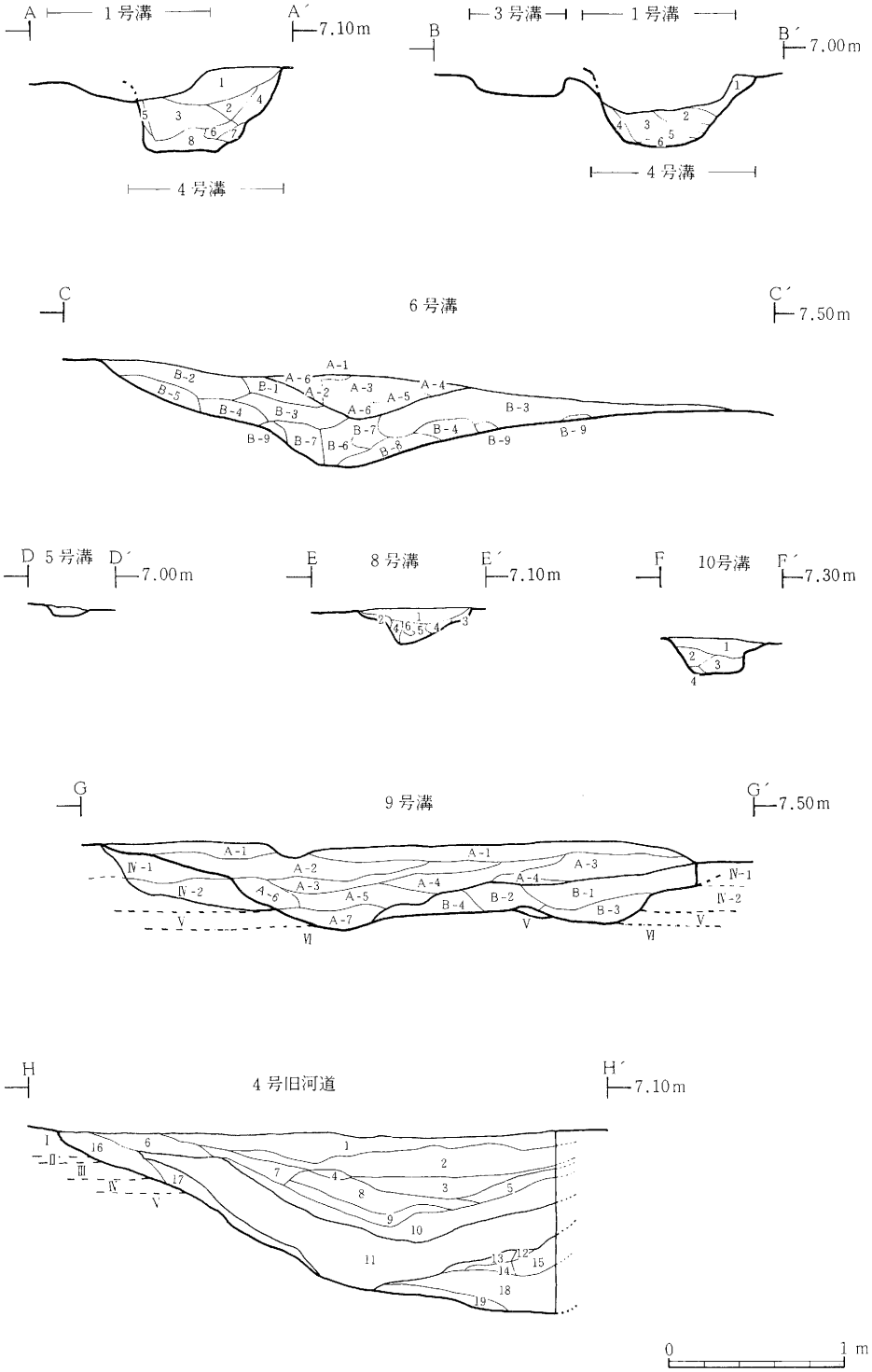


第19図　須恵器坏Ａ207・Ａ208（東側）出土状況図

101:第15・23図、図版12〉を出土し、１号溝、２号溝に切られる。

５号溝　調査区北側を東西方向に延びる溝で、確認面で上端幅30cm、底幅24cm、深さ10cm程度、断面形が逆台形である。８号井戸跡に切られている。

６号溝　調査区中央部を南北方向に延びる溝で、調査区の西側微高地（標高約7.20ｍ）と東側低地(約6.90ｍ)を企画している。確認面での上端幅約100cm、底幅30cm、深さ40cm程度、断面形は西側が急な、東側が緩やかな立ち上がりを示す舟底形で、東側の落ちこみラインが不明瞭である。堆積土はＡ層とＢ層との間に堆積の差異が認められ、時間的なずれがあるものと考えられる。Ａ－１層から須恵器壺２点〈Ａ203:第24図、図版13、Ａ205:第24図、図版13〉、Ｂ－１層とＢ－２層からは墨



第20図　溝跡・4号旧河道土層図

第８表　溝跡土層註記表

遺構	層位	土色	土性	その他
4号溝（A－A'）	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	白い砂粒と少量の酸化鉄を含む
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	少量の白い砂粒と酸化鉄を含む
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む
	4	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多く含む
	5	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	
	6	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト質粘土	酸化鉄とブロック状の砂を少量含む
	7	7.5Y3/2 黒褐色色	粘土質シルト	
	8	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含み、ブロック状に黒褐色の粒土を含む
4号溝（B－B'）	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄、白い砂粒を少量含む
	2	10YR3/3 灰黄褐色	粘土質シルト	
	3	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	少量の酸化鉄とブロック状の黒褐色粘土を含む
	4	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	
	5	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	パミス・酸化鉄を少量含む
	6	10YR1/3 黒褐色	粘土	
6号溝	A-1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
	2	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト	
	3	10YR2/1 黒色	砂質シルト	白色パミスを多く含む
	4	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	白色パミスを多く含む
	5	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	
	6	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
	B-1	10YR3/3 暗褐色	シルト	白い砂粒を少量含む
	2	10YR2/1 黒褐色	シルト	ブロック状のにぶい黄褐色シルトと少量の炭・白い砂粒を含む
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	白い砂粒をわずかに含む
	4	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	粗い砂粒を含む
	5	10YR4/4 褐色	砂	酸化鉄を多く含む
	6	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を少量含む
	7	10YR3/3 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
	8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	9	10YR5/3 にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
5号溝		10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質粘土	酸化鉄を含む
8号溝	1	7.5YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	白い砂粒と少量の酸化鉄を含む
	2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
	3	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
	4	7.5YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
	5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
	6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	5層にブロックとして含まれ、酸化鉄をわずかに含む
10号溝	1	10YR3/1 黒褐色	砂質粘土	酸化鉄を含む
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質粘土	
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多く含む
	4	10YR5/6 明黄褐色	シルト質粘土	
9号溝	A-1	10YR3/4 暗褐色	シルト質砂	パミス、粗砂を多く含む
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	パミスをほとんど含まず、少量の白色シルトと遺物を多く含む
	3	10YR5/2 にぶい黄橙色	シルト	白色シルト（火山灰？）を多く含み、その単一層の部分もあり、上面より遺物出土
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質砂	パミスを多く含み、馬歯出土
	5	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	パミスを含まない
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土質砂	パミスを含まず、マンガンを霜降状に含む
	7	10YR5/2 灰黄褐色	砂質粘土	パミスを含まず、馬歯出土
	8	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	マンガンを霜降状に含む
	9	10YR3/4 暗褐色	粘土質砂	パミスを含まない
	B-1	10YR3/2 黒褐色	粘土質砂	パミスと霜降状のマンガンを含み、馬歯出土
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質粘土	少量のパミスと多量の酸化鉄、マンガンを含む
	3	10YR3/3 暗褐色	砂質粘土	パミスを含まない
	4	欠落		
	Ⅳ-1	10YR4/4 褐色	砂	
	2	10YR3/3 にぶい黄褐色	砂	
	Ⅴ	10YR3/3 にぶい黄橙色	粘土	
	Ⅵ	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
4号旧河道	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を少量含む
	3	7.5YR4/2 灰褐色	粘土	
	4	10GY4/1 暗緑灰色	砂質シルト	
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をわずかに含む
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	7	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
	8	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	
	9	10Y3/1 オリーブ黒色	シルト	
	10	5Y3/1 オリーブ黒色		
	11	10YR2/3黒褐色シルト質粘土と10GY3/1暗緑灰色砂質シルトとの合層		
	12	2.5Y5/3 オリーブ褐色	砂	
	13	5BG4/1 暗青灰色	砂	
	14	7.5GY4/1 暗緑灰色	砂	粒子が粗い
	15	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	砂	粒子が粗い
	16	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	17	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	18	5G3/1 緑黒色	砂	
	19	10GY4/1 暗緑灰色	シルト質砂	
	Ⅰ	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	酸化鉄を含む（基本層位Ⅴ層に対応）
	Ⅱ	7.5YR2/1 黒色	シルト質粘土	パミスを含む
	Ⅲ	7.5YR4/1 褐灰色	粘土	
	Ⅳ	7.5Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	
	Ⅴ	7.5GY4/1 暗緑灰色	砂	

書『十』のある須恵器坏が各１点ずつ出土した〈Ａ207：第19・23図、図版13、Ａ208：第19・23図、図版13〉。他にも土師器、須恵器の破片の他、丸瓦片〈Ａ503：第25図、図版15〉を出土している。Ｂ－３層の褐灰色粘土質シルトとＢ－８層の灰黄褐色粘土質シルトは溝の東側にも不定形な広がりをもち、８号溝、27号土壙の堆積土にも含まれる。１号焼土遺構に切られ、８号溝、９号溝、10号溝、27号土壙を切っている。

第9表　溝跡一覧表

（　）内は最大・最小値を示す　単位cm

No.	上端幅	底　幅	深　さ	断面形	そ　の　他
1	(120) 80 (32)	(110) 70 (20)	(85) 20 (6)	逆台形	須恵器坏(A209)、中世陶器片
2	(102) 70 (60)	(80) 60 (32)	(11) 7 (5)	逆台形	
3	(58) 50 (42)	(48) 46 (40)	(12) 10 (7)	逆台形	
4	(100) 60 (40)	(54) 40 (22)	(50) 20 (8)	逆台形	土師器甕(A004)、同坏(A009、A010、A011) 土師質の土器(A101)
5	(38) 30 (22)	(32) 24 (16)	(25) 10 (4)	逆台形	
6	(160) 100 (62)	(46) 30 (10)	(66) 40 (30)	舟底形	須恵器壺(A203、A205) 須恵器坏(墨書『十』)(A207、A208) 丸瓦(A503)
7	(106) 80 (68)	(62) 50 (40)	(11) 5 (2)	逆台形	
8	(96) 60 (18)	(26) 20 (12)	(23) 15 (5)	舟底形 (下部V字状)	須恵器坏(A210)、土錘(紛失)
9	(340) 200 (170)	(190) 150 (120)	(46) 35 (20)	舟底形	土師器甕(A001)、同坏(A008) 須恵器甕(A202)、平瓦(A501、A502)
10	(72) 50 (20)	(60) 40 (16)	(39) 20 (8)	逆台形	

7号溝　調査区中央部を6号溝の東側に平行して南北方向に延びる溝で、確認面で上端幅80cm、底幅50cm、深さ5cm程度、断面形が逆台形である。約5m程残存しており、8号溝に切られている。

8号溝　調査区中央部から南東に延びる溝で、確認面で上端幅60cm、底幅20cm、深さ15cm程度、断面形が下部でV字状となる舟底形である。須恵器坏〈A210:第23図〉の他、E－18ライン付近より土錘を1点出土した。6号溝に切られ、7号溝を切っている。

9号溝　調査区北西部を東西方向に延びる溝で、確認面で上端幅2m、底面幅1.5m、深さ35cm程度、断面形が舟底形である。下部からは東西方向に延びる2条の溝の痕跡が確認された。遺構確認面（Ⅳ層）から深さ20cm程のところに白色シルト（火山灰か？）を多く含む層（A－3層）があり、5cm程の単一層となっている部分もある。この層の上面からは、多量の土師器、須恵

器、瓦の破片を出土し、土師器甕〈A001：第22図、図版12、A005：第22図〉、土師器坏〈A008：第22図〉、須恵器甕〈A202：第24図〉、平瓦〈A501：第25図、図版15、A502：第25図、図版15〉A－4層、A－7層、B－1層の各層からは馬歯を出土していることから、平安時代の捨場として使われていたと考えられる。1号井戸、4号・20号・24号・25号・26号土壙、6号溝に切られている。

10号溝　調査区南辺中央部を東西方向に延びる溝で、確認面で上端幅50cm、底幅40cm、深さ20cm程度、断面形が舟底形である。6号溝、10号土壙に切られている。

以上、出土遺物、重複関係よりみて、4号、6号、7号、8号、9号、10号の各溝は平安時代に、1号、2号、3号、5号の各溝は中世に属するものと考えられる。

5．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は掘立柱列も含めて13棟確認されたが、柱穴は調査区全域で約240を数え、さらに多くの建物が存在していたと考えられるが、明確な建物跡として確認されるに至らなかった。建物跡は6号溝の西側から多く（8棟）検出され、残りも6号溝と1号溝とに狭まれた範囲から検出されている。柱穴掘り方からの出土遺物は少なく、1号、5号建物跡の柱穴から土師器甕の体部片を出土した他には、2号建物跡の柱穴から中世陶器片を出土しただけである。柱穴の大きさは確認面で直径9～44cmで形は一様でなく、柱痕跡は検出されたもので直径10～12cm程である。

1号掘立柱建物跡　桁行3間、梁行1間以上と考えられる東西棟建物跡である。南北柱列の方向はN－19°－E、柱間寸法は桁で103～171cm、梁で206cm、桁行総長417cm、梁行総長206cm以上である。柱穴の掘り方は確認面でほぼ円形で、直径は20～36cm、深さは13～36cm、南西角の柱穴にのみ直径10cmの柱痕跡を検出した。堆積土は黒褐色シルトで炭を含み、南西角とその東隣りの柱穴から土師器甕の体部片を出土した。9号溝を切っている。

2号掘立柱建物跡　桁行2間、梁行1間の東西棟である。南北柱列はN－19°－E、柱間寸法は桁で257～280cm、梁で257cm、桁行総長537cm、梁行総長257cmである。柱穴の掘り方は確認面で円形又は隅丸長方形と一様でなく、直径は18～34cm、深さは12～32cmで柱痕跡は検出されなかった。堆積土は色調がにぶい黄褐色ないし黒褐色と一様ではないシルトで炭を含み、南東角の柱穴から中世陶器片を出土した。北東角の柱穴は3号井戸に切られ確認できない。

3号掘立柱建物跡　桁行2間、梁行1間の東西棟である。南北柱列はN－18°－E、柱間寸法は桁で177～200cm、梁で200cm、桁行総長377cm、梁行総長200cmである。柱穴の掘り方は確認

面で円形、楕円形、三角形と変則的で、直径は24～44cm、深さは6～39cmで、北東角の柱穴から柱痕跡が検出された。堆積土は灰黄褐色ないし黒褐色のシルトで炭を含み、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

4号掘立柱建物跡　東西2間、南北1間以上で方向は不明である。南北柱列はN－22°－E、柱間寸法は東西229～234cm、南北240～251cm、東西総長463cm、南北総長251cm以上である。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし歪んだ楕円形で、直径は18～36cm、深さは12～31cmである。北東角とその西隣りの柱穴から直径10cm程の柱痕跡を検出した。堆積土は黒褐色シルトで炭を含み柱穴掘り方からの出土遺物はない。

5号掘立柱列　調査区中央部南寄りに検出された一本柱列で、東西3間、柱間寸法は297～303cm、総長897cmである。南側に展開する可能性もあるが柱穴を検出せず不明である。柱列方向は2号建物跡と同じN－19°－Eである。柱穴の掘り方は確認面で歪んだ円形ないし楕円形で直径は24～40cm、深さは10～54cmである。北東角を除く3つの柱穴から直径10cm程の柱痕跡を検出した。堆積土はにぶい黄褐色ないし黒褐色のシルトで炭を含み、西端の柱穴から外面に焼痕の付着した土師器甕の体部片を出土した。

6号掘立柱建物跡　桁行3間、梁行1間の南北棟である。南北柱列はN－24°－E、柱間寸法は桁で160～171cm、梁で194cm、桁行総長502cm、梁行総長194cmである。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし歪んだ楕円形で、直径は16～38cm、深さ15～29cmで、南東角の柱穴より直径12cmの柱痕跡を検出した。堆積土は灰黄褐色ないし黒褐色の粘土質シルトで炭を含んでいる。柱穴掘り方からの出土遺物はない。

7号掘立柱建物跡　東西3間、南北2間以上で方向は不明である。南北柱列はN－21°－E、柱間寸法は東西126～149cm、南北149～177cm、東西総長401cm、南北総長326cm以上である。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし楕円形で、直径は24～36cm、深さ19～34cmである。堆積土は黒褐色粘土質シルトで灰黄褐色粘土質シルト、炭を含み、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

8号掘立柱列　1号建物跡東西柱列の北側に平行に検出された一本柱列で、東西2間、柱間寸法は160cm等間、総長320cmである。柱列方向は1号建物跡東西柱列と同じくE－19°－Sである。柱穴の掘り方は確認面で円形で、直径は22～42cm、深さ9～28cmである。東西両端の柱穴から直径10cm程の柱痕跡を検出した。堆積土はにぶい黄褐色シルトで、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

9号掘立柱列　調査区西辺に検出された一本柱列で、柱列方向はN－20°－E、南北3間、柱間寸法は149～183cm、総長492cmである。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし楕円形で、直径は18～34cm、深さ7～38cmである。堆積土は黒褐色で、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

10号掘立柱列　調査区南辺中央に検出された一本柱列で、柱列方向はN－24°－Eである。柱

間寸法は166～189cm、総長355cmである。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし楕円形で、直径は18～34cm、深さ７～17cmである。北端の柱穴から直径12cmの柱痕跡を検出した。堆積土はにぶい黄褐色シルトで、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

11号掘立柱列　調査区東部に検出された一本柱列で、柱列方向はＥ－22°－Ｓ、柱間寸法は166cm等間、総長332cmである。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし歪んだ円形で、直径は22～30cm、深さ16～36cmである。西端の柱穴から直径10cmの柱痕跡を検出した。堆積土は黒褐色シルトで炭を含み、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

12号掘立柱列　11号柱列の南側に平行して検出された一本柱列で、柱列方向はＥ－23°－Ｓ、柱間寸法は200～211cm、総長411cmである。柱穴の掘り方は確認面で円形ないし方形で、直径22～26cm、深さ11～24cmである。堆積土は黒褐色粘土質シルトで炭を含み、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

13号掘立柱列　調査区東部に検出された一本柱列で、柱列方向はＮ－22°－Ｅ、柱間寸法は166～183cm、総長709cmである。柱穴の掘り方確認面で円形ないし長方形で、直径20～34cm、深さ17～35cmである。北から二番目の柱穴を除いて直径10～12cmの柱痕跡を検出した。堆積土は黒褐色ないし灰黄褐色の粘土質シルトで炭を含み、柱穴掘り方からの出土遺物はない。

６．そ　の　他

調査区東部からは南北に流れる旧河道跡（４号旧河道）が検出された。確認面はⅤ層ないしⅥ層であるが、トレンチ東壁・南壁の観察によれば、地表下10～60cmで５号旧河道の上面となり、断面形は２段の立ち上がりをもつ舟底形で、最も西側に広がったところでは１号溝を切っている。調査区内で河道跡を掘り下げたところ、緩やかな立ち上がりをみせた後、ほぼ平坦な川底を検出した。出土遺物には、土師器甕の体部片１点、須恵器甕の体部片１点、中世陶器片６点、石臼破片２点〈Ｃ－001：第25図、図版15、Ｃ－002〉がある。調査区東壁中央部で３本の旧河道（溝か？）に切られた痕跡がある。

16号井戸の底部付近の壁（確認面より深さ約２ｍ、井戸側壁の基本層位Ⅹ層）に自然木が観察されたため、16号井戸の周囲を東西約３ｍ、南北約４ｍの方形に深掘りした。その結果、直径10～50cm程度の自然流木が７本分検出された。当遺跡が立地する以前、七北田川が土砂の堆積と氾濫を繰り返し、沖積平野を形成していた頃に、水分の多い灰色の粘土質細砂とともに堆積していたものであろう。

Ⅵ 出 土 遺 物

出土遺物は、土師器・須恵器・中世陶器が主であり、全体の９割以上を占める。この他には青磁・瓦・小刀・古銭・石臼・木桶および井戸枠材が出土しているが少量である。出土遺物の全体量は遺物収納用コンテナにして約８箱分である。

１．土 製 品

（１） 土師器（A001～012）

土師器は甕と坏があり、図化できたのは甕５点（001～005）と坏７点（006～012）の計12点である。

〈甕〉 ５個体のうち器形の全体がわかるものはA004だけで、他は欠損部分が多いものである。

A001（９号溝Ａ－３層）は大形の長胴甕である。欠落部があるので器高は不明であるが、推定復元すると約37cmに達し、口径は24.3cm を計る。器面調整は外面の口縁が叩き目の後ロクロナデ、体部上半分がロクロ回転を利用したカキ目、下半がヘラケズリによる。内面は口縁部が縦方向のヘラナデにより調整される。外反した口縁端部は直立する。

A002（Ⅲ層）は、大形の甕の口縁部から体部の破片で口径は15.2cmを計る。体部は口径より広く最大径は18cm程である。ロクロは使用されていない。器面調整は、外面の口縁部がヨコナデ、体部上半がハケメ調整される。内面は、口縁部ヘラナデ、体部上半ナデにより調整される。口唇部は平坦である。

A003（表採）は中形の甕で、口径は18.4cmを計る。体部径は口径より小さい。器面調整は内外面ともにロクロによる。口縁端部は直立する。

A004（４号溝１層）は小形の甕で口径17.8cm、器高13.9cm、底径7.8cmを計る。底部は回転糸切り痕を有し、器面は内外面ともロクロ調整される。

A005（９号溝）甕の体部下端から底部の破片である。底径は7.2cmで、静止糸切り痕を有す。器面は内外面ともロクロ調整される。

以上５点の甕のうち、A002以外は器面調整にロクロが使用されることから表杉ノ入式に属し、平安時代のものと考えられる（註１）。A002はロクロは使用されていないが、他遺跡において、ロクロを使用した表杉ノ入式の土器と共伴するものに類似しており、平安時代のものと考えられる。

〈坏〉 坏は図化した７点の全てが回転糸切り痕を有し、外面が口縁から体部下端までロク

ロ調整され、内面はヘラミガキされる。A007以外は内面黒色処理されている。

A006(Ⅲ層) は底径に比して口径の大きな坏で、内弯する体部上半が肥厚する。

A007(Ⅲ層) 底部から緩やかに立ち上がり口縁近くで一度内弯し端部が肥厚して外反する。

A008(9号溝A－1層) 底部から内弯ぎみに立ち上がり、端部が外反する。

A009(4号溝1層) 底部から丸味をもって立ち上がり、口縁端部が肥厚して外反する。

A010(4号溝1層) 底部と体部の境が不明瞭で、底部から丸味をもって立ち上がる。胎土・焼成・色調ともA009に類似する。

A011(4号溝1層) 底部から丸味をもって立ち上がる。胎土・焼成・色調ともA009 に類似する。

A012(Ⅳ層) 底部から丸味のある立ち上がりを呈す。

以上の坏はいずれも表杉ノ入式に属するもので、平安時代と考えられる(註1)。A009～011の3点は4号溝からの出土で、器形・胎土・焼成・色調に類似性が強く認められ、同時期のものと考えることができる。また、A012もこれに近い形態のものであろう。

(2) 土師質の土器 (A101～103)

土師器と胎土・焼成は非常に類似するが、黒斑は認められず、また、切り離した技法のわかるものは回転糸切りにより、切り離し後は調整されない。内面にはヘラミガキ調整や黒色処理も行なわれていないものである。灰色から褐色を呈す。坏形のもの1点と皿形のもの2点の計3点がある。

A101(4号溝2層) 小形の坏で、回転糸切り底の底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともロクロ調整され、灰色を呈して、焼きは硬い。

A102(Ⅲ層) 小さく浅い皿に、端部がわずかに広がる高台が付く。皿の体部から口縁部は直線的に外傾する。底部の切り離し技法は不明である。器面は全てロクロ調整される。灰白色から浅黄橙色を呈し、焼きは硬い。

A103(表採) 口径の割に大きな回転糸切り底の底部にわずかに体部と口縁とを作りあげただけの簡単な小形の皿である。口縁部は内弯する。灰白色からにぶい橙色を呈し、焼きは硬い。

以上の3点のうち、A101は、「須恵系土器」(註2) と呼ばれている一群の土器に類するものと考えられ、平安時代に位置付けられる。他の2点も、土師器や須恵系土器とは異なるが、土師器の系譜に属するものであり、時代を考えるならば、平安時代と考えて大過ないものであろう。

（3）　須恵器（A201～212）

須恵器は、器形全体のわかるものは坏３点だけで、他の多くは各部の破片である。図化したものは甕２点・壺４点・坏６点の計12点である。

〈甕〉　甕は口縁部と底部の破片が各１点ある。

A201(27号土壙１層）口縁部の破片で口径は約26cmと復元される。口頸部はわずかに外傾して立ち上がり、端部で外反し、口縁端部は肥厚して上下両方に広がる。両面ロクロ調整。

A202(９号溝Ａ－１層)底部から体部下端の破片で、底径は11.5cmを計る。体部外面はヘラケズリ調整、内面は底部から体部残存部までナデにより調整されている。

〈壺〉　肩部から頸部の破片１点と、底部から体部下端の破片３点の計４点がある。

A203(６号溝Ａ－１層）肩部から頸部の破片で、内外面ともロクロ調整痕を有す。頸部の内径は6.4cmを計り、比較的広口の壺である。胎土は非常に緻密で、表面には透明で薄い自然釉がかかる。内外面とも灰白色から灰色を呈す。

A204(表採）底部から体部にかけての破片で、体部下端から底部の周縁に高台が貼付けられている。底径7.6cm。内外面とも灰白色を呈し、胎土・焼成は非常に良好である。

A205(６号溝Ａ－１層）底部から体部にかけての破片で、体部下端から底部の周縁にA204と類似した高台が付く。灰白色を呈し、胎土に砂を多く含むが焼成は良好である。底径11.4cm。

A206(Ⅲ層)底部から体部にかけての破片で、体部下端に外側に突出した断面が三角形の高台が付く。底径は12.8cmを計る。外面には指ナデの調整痕を残す。黒っぽい灰色を呈し、胎土はやや粗いが焼成は良好である。

〈坏〉　坏には図化したもの６点があり、このうち切り離し技法からみると回転ヘラ切りのもの３点と回転糸切りのもの２点、不明１点があり、回転ヘラ切りのものには高台の付いたものも１点ある。回転糸切り底の３点のうち２点に墨書が認められた。

A207(６号溝Ｂ－１層)回転糸切りの底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。内外面ともロクロ調整され、体部外面中央部に正立して「十」の墨書がある。灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口径14.8cm、底径5.2cm、器高4.6cm。

A208(６号溝Ｂ－２層）A207と同様の形態・胎土・焼成・色調を呈し、同時期の焼成・使用・廃棄と考えられるものである。やはり体部外面中央部にA207と同一書体で「十」の墨書がある。口径14.6cm、底径5.6cm、器高4.6cm。

A209(１号溝２層）回転糸切りの底部から緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに内弯する。外面には、ロクロによる幅の広い凹凸が認められる。口径14.2cm、底径5.6cm、器高4.6cm。灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

A210(８号溝）回転ヘラ切りの後にナデ調整される底部から、体部は丸味をもって立ち上が

る。底径7.8cm。灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

A211(Ⅲ層) 底部から高台までの破片で、底部中央には回転ヘラ切り痕跡が残る。体部と底部の境に貼付けられた高台はやや外に広がり、端部は丸くなっている。底径7.6cm。灰色を呈し、胎土・焼成は良好である。

A212(19号土壙) 口縁から体部の破片で、口縁が外反する。体部外面にはロクロによる幅の狭い凹凸が認められる。胎土は砂を多く含むが焼成は良好で、灰白色を呈す。口径14.6cm。

以上12点の須恵器について、その製作年代を検討すると、平安時代(9～11世紀)のものと考えることができる。

(4) 中世陶器(A301～307)

中世陶器は甕と擂鉢があり、図化したものは7点ある。図化したもの以外にも32個の少破片があり、灰オリーブ色やオリーブ色の釉がかかったものもある。

〈甕〉 口縁部片3点、体部片1点を図化した。

A301(7号井戸1層) 肩部かつ頸部にかけての破片である。破片のため口径は複元できないが、大形の甕と考えられる。口縁部は端部が受口状に近い形態を呈す。器面は内外面ともヨコナデ・ナデにより調整される。灰色を呈し、焼きは堅緻である。

A302(表採) 口縁部の破片で、口縁端部はN字状に近い形態を呈す。内外面ともヨコナデにより器面調整される。断面灰色・表面赤褐色を呈し、焼きは堅緻である。

A303(表採) 口縁部の破片で、口縁端部はA302と同様にN字状に近い形態を呈すが、下方への突出部はA302よりも発達している。内外面ともヨコナデにより器面調整される。口縁部は黒色で、他は赤褐色を呈すが、肩部には灰オリーブ色の自然釉が付着する。断面は灰色で焼きは堅緻である。

A304(表採) 押印のある大甕の体部片で、押印の形状は格子目文である。器面は外側がナデ、内側は粘土紐の接合痕をそのまま残している。内外面は黒色を呈し、断面は灰色である。

〈鉢〉 口縁部から体部の破片2点と体部から底部の破片1点の計3点を図化した。

A305(7号井戸1層) 体部から口縁へと直線的に広がる鉢で、複元によると口径は33cm程になる。器面調整はロクロによるが、残存する体部外面下端にはわずかにヘラケズリ痕跡も認められる。内面下端付近は、わずかに磨滅している。内外断面ともに灰白色を呈す。

A306(7号井戸1層) A305に類似するが、器形・器厚と焼成にわずかに差が認められる。A305と同様に残存する体部下端外面にヘラケズリの痕跡が認められ、また内面には指ナデの痕跡もある。内面の下部¼はわずかに磨滅している。内外断面とも灰白色を呈す。

A307(10号井戸5層) 体部下半から底部の破片で、底部周縁には高さ1cm、径14cmの端部が

丸い高台がついている。内外面ともロクロにより調整されるが、外面には体部下端から１cm程立ち上がった所に幅1.5cmのヘラケズリの帯が一条巡る。内面はわずかに磨滅して滑らかになっている。内外断面とも灰白色を呈す。胎土には粗い砂が多く混じるが、焼きは堅緻である。

本調査によって出土した中世陶器の主たるものは以上のようであるが、これらは常滑系に類するもので、赤羽一郎氏の常滑編年図表（註３）に位置付けると、甕Ａ301～303は、Ⅲ期（鎌倉時代後半から南北朝時代中葉）にあたる。また、鉢Ａ307はⅡ期後半ないしⅢ期（鎌倉から南北朝時代中葉）にあたる。また、楢崎彰一氏の知多古窯出土陶器編年図（註４）によれば、甕Ａ301・Ａ303・鉢Ａ307は、鎌倉中期から後期の年代に相当するものと考えられる。鉢Ａ305と鉢Ａ306は、甕Ａ301と同時期に７号井戸に廃棄されたものであり、その製作年代も近いものと考えられる。よって、図化した中世陶器は年代に幅をもたせて考えると鎌倉時代から南北朝時代中葉まで、また年代幅を狭く考えると鎌倉時代中期から後期と考えられる。

（５）　青磁（Ａ401～405）

青磁は５点出土したが、いずれも小片であって、全体の器形、文様の明らかなものはない。

Ａ401(17号井戸１層）碗の口縁部から体部の破片で、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚して外反する。推定口縁径は16.5cmである。内面には２条の平行沈線による「了」字形の文様が認められるが、これは劃花花弁文である。胎土は灰色で、釉は灰オリーブ色を呈すが、外面下部はわずかに白濁している。

Ａ402(表採）碗の体部下端の破片である。外面には縦方向に７条の沈線となる櫛目文が施され、内面には、横位に流れる３条の沈線とそれと交叉する櫛目文がみられる。胎土は灰色で、釉は灰オリーブ色を呈す。

Ａ403(表採）碗の体部片である。内外面とも文様は認められない。胎土は灰白色で、釉は灰オリーブ色を呈す。

Ａ404(18号土壙３層）碗の体部の小破片で、外面に縦方向に比較的幅の広い凹凸が認められることから蓮弁文の碗と考えられる。胎土は灰白色で、釉は緑灰色を呈す。胎土に比して釉は厚い。

Ａ405(18号土壙３層）碗の体部の小破片である。文様は認められない。胎土は灰白色、釉は緑灰色を呈す。釉は厚く１mm前後ある。

以上５点の青磁のうち文様のある３点（Ａ401・Ａ402・Ａ404）は、中国青磁のうち13～14世紀頃の特徴をもつものである。したがって鎌倉時代から南北朝時代のものと考えられる。

(6)　瓦（A501～503）

瓦は、平瓦片２点（A501・A502－９号溝）と丸瓦片１点（A503－６号溝Ｂ層）の３点が出土した。３点とも凹面は布目が残る。凸面は、平瓦は縄目痕を有し、丸瓦はナデにより調整されている。いずれも奈良時代ないし平安時代に多賀城や陸奥国分二寺に供給されたものと同類であると考えられる。

(7)　その他の土製品（A601）

以上のほか土製品としては擂鉢と土錘がある。

A601（４号旧河道）は擂鉢の口縁から体部の破片で、直線的な体部から肥厚して強く外反する口縁に至り、口縁の上面が平坦になっている。内面には７条からなる筋目が入っている。残存部内面の下端は著しく磨滅しており、筋目は消えている。胎土は灰色で、表面は黒色を呈し焼けはやや軟質である。A601と同形態の破片は他にも１点出土しているが、出土層位・遺構は不明である。ただし、この２点の擂鉢と胎土、焼成色調が肉眼観察で同様の底部片が４号旧河道の２層中から出土しているので、３点とも旧河道中に包含されていたものと考えられる。年代はこの旧河川の年代によって考えることができる。この旧河川は、中世集落跡の上を流れたものであり、またこの他に明治以降に流路があったという伝承もないことから、中世末から近世頃の年代が考えられる。したがって上記の３点の土器も中世末から近世頃のものと考えられる。

土器の他には、８号溝中より長さ５cm程の円筒形で中心に孔のある土錘が１点出土したが、調査途中で行方不明となった。

２．金属製品

(1)　刀（B001）

６号井戸より小刀が１点出土した。平棟平造りの直刀で、刀身前方部が欠損している。現存長12.1cm、身幅は区の付近で2.4cm、棟幅は区の付近で３mmを計る。茎は長さ2.8cm、棟幅３mm刃部側２mm、茎幅は区付近で1.4cm、茎尻付近で1.1cmを計る。目釘孔はみられない。

(2)　古銭（B101～102）

２種２点が出土したが、内１点は⅔を欠損する。B101は６号井戸の確認面より出土した「聖宋元宝」で建中靖国元年（西暦1101年）初鋳の北宋銭である。B102はⅢ層中より出土したもので、下部に「元」の字が読めるが、上部を欠損するため、銭名は不明である。

種別	器形	遺構	井戸											土壙				焼土	溝									Pit										旧河道		試掘	表採	
		部位	1号	2号	3号	6号	7号		9号		10号	15号	16号	4号			27号	1号	1号	4号		6号		8号	9号			12	13	14	16	21	98	100	107	124	155	4号				
			1層	1層		1層	1層	2層	1層		2層	1層	1層	1層	2層		1層		1層	2層	8層	B-1層	B-2層		1層	2層					1層								1層	2層	Ⅲ層		計
土師器	甕	口縁部					1							2					1				1		20	8																11	44
		頸部																							7						1												8
		体部	1	2										3	2				6			3	11	1	97	98		1	1	1	1	1		1		1					2	51	284
		底部						1				1														13												1		1		17
	坏	口縁部					1							1				1	1			6	6		7	4																13	40
		体部					2							3					4				2		43	21									1							13	89
		底部								1					4			1					1			4																7	18
	不明	口縁部													1											75																	76
		体部																	2	1						270	149																422
		底部	1																								8																8
		不明														10										76																	87
須恵器	甕	口縁部	2																								7																7
		体部				1															1				3		15																22
		底部																									1																1
	壺	体部	1					1																													4			2		7
	坏	口縁部																					2				1																4
		体部																	2				1		1		1													4		9
		底部					1								1										1		1																4
	不明	口縁部																									1																1
		頸部															1		1																							1	3
		体部								1	2				2		1								1	1																7	15
		底部													1								1																			2	4
中世陶器	甕	口縁部																																								1	1
		頸部											1																														1
	壺	頸部			1																																					1	2
		底部			1																																					1	2
	不明	頸部													1				1																								2
		体部					1		1	1		1	2						1														1					3			12	23
		底部																																					2				2
		不明												1																													1
		計	5	2	2	1	6	2	1	3	2	2	3	10	12	10	2	2	19	1	1	9	25	1	180	570	184	1	1	1	2	1	1	1	1	1	4	4	2	9	120	1204

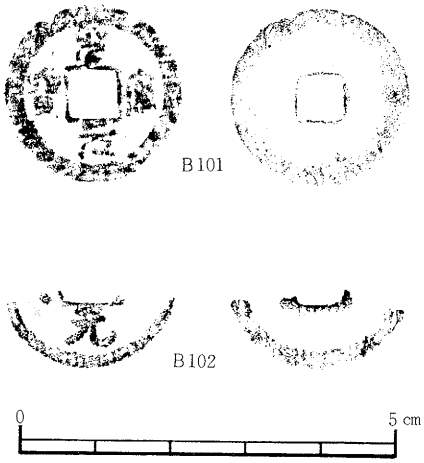
第10表　土器破片集計表（図化したものを除く）

3．石　製　品（C001～002）

石製品としては石臼の破片が２点出土した。C001は４号旧河道堆積土中より出土したもので、茶臼の下臼の側縁部の破片と考えられる。石材は安山岩である。側縁部の上面幅は1.8cmを計る。他の１点（C002）も旧河道よりの出土である。部位は不明である。

4．木　製　品（D001～005）

出土した木製品には井戸枠材、桶、その他の木材片がある。



B101　聖宋元宝　６号井戸
B102　●●元宝　Ⅲ　層

第21図　古 銭 拓 影

（1）　井戸枠材（16号井戸）

D001は16号井戸の四角にあった隅柱のうち西南角にあったものである。ほぼ四角柱のもので長さ66cm、中央部断面の一辺は6.5～7.5cmある。底面はほぼ平らである。残存部の中央付近の井戸の北壁と東壁に向いた面には横木を挿入するための方形の柄穴（北側は縦６cm、横5.5cm、東側は縦６cm、横５cm）が切ってある。柄穴は北側と東側では高さを多少ずらしており北側が高い位置にある。

D002は、D001の東向きの柄穴より南東角の隅柱にわたされた断面長方形の横木で、長さは77cm、幅は広い方で5.5cm、狭い方で４cmを計る。両先端は尖らせてある。

D003とD004は角の隅柱と隅柱の間に横木と壁にはさまれて立て並べられた側板材のうちの２点で、D003は78.5cm、幅16.5cm、厚さ３cmを計る。D004は長さ46cm、幅23cm、厚さ４cmを計る。

（2）桶（３号井戸）

桶は、側板８点と底板１枚、それに箍の残片とからなる。側板は長さ19.5～20.5cm、中央部で幅３～5.5cm、厚さ１～1.3cmのものであるが、そのなかに長さ30cmのものも１点（D005）出土した。これは、幅3.3～４cmで、上端近くに縦2.2cm、横1.8cmの方形の孔があけられている。これには対となるものがあって、横木がわたされていたと考えられる。側板はどれも底に近い方の幅が狭くなっている。また、下端から４～５cm上った所から上端にかけて厚さ１mm程黒色

の付着物が観察される。

底板（D006）は、円形で直径は柾目の方向で21.1cm、柾目に直交して21.6cmある。厚さは1.7cm～2.4cmある。内面側にはやはり黒い付着物が観察される。

註１　加藤孝「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」（『宮城学院女子大学研究論文集』Ⅴ　1954年）

氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」（『歴史14』　1957年）

註２　桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」（『宮城県多賀城跡調査研究紀要』Ⅰ　1974年）

桑原滋郎「宮城県多賀城調査研究所年報1971年」

註３　赤羽一郎「常滑編年図表」（『世界陶磁全集３　日本中世』小学館1977）

註４　楢崎彰一「知多古窯出土陶器編年図」（『日本の考古学』Ⅵ　1967年）

Ⅶ　ま　と　め

今回の調査で検出された遺構は井戸跡11基、土壙19基、焼土遺構１基、溝跡10条、掘立柱建物跡13棟、柱穴を含めたピット240個である。

井戸跡は前述したとおり４つの型式に分けられ、そのうち、円形の掘り方の中に方形の素掘りをもつＢタイプよりも、円形の掘り方で徐々にすぼまるＣタイプが古式である。出土遺物は少量の土師器や須恵器の小破片の他、中世陶器、聖宋元宝、青磁碗の破片があり、中世以降の遺物が主であり、また近世以降の遺物を共伴しておらず、11基の井戸跡は中世に属すると考えられる。16号井戸を除くと全て素掘りの井戸であり、このため長期の使用に耐えられず、調査区内の狭い範囲に何度も掘りかえされ、井戸跡が密に分布しているものと考えられる。

土壙は、平安時代のものとしては６号溝（平安時代）に切られた27号土壙がある。中世のものとして確実なものは中世陶器片を出土した４号土壙と、３号井戸（中世）に切られ、青磁片を出土した18号土壙がある。他の土壙は時期を決定する直接資料に欠けるが、井戸跡や掘立柱建物群と同時期のものが多くあるであろう。

焼土遺構は年代決定する例証を欠くが、重複関係により６号溝（平安時代）以降のものであることだけが知られる。

溝跡は、10条のうち４号・６号・８号・９号の４条がその出土遺物から平安時代と考えられる。１号溝は、出土遺物はないが他遺構との重複関係と旧河道との関係、掘込み面から考える

と平安時代以降、近世以前の時期を与えることができる。また、1号溝は、7号井戸と16号井戸を除く8基の井戸と、掘立柱建物跡群を取り囲んでおり、これらと密接な関係が考えられる。

平安時代と考えられる6号溝は、調査区を、東西に区分（東に低く、西に高い）しているが、この溝が存在した時点においては、西側微高地上が生活の主体となっていた地区で、その中心は本調査区よりもさらに西方であったと考えられる。また、この微高地の縁辺に位置する9号溝からは930点余りの土器片や瓦片が出土したが、出土量の割には接合できるものが少ない。これは、ここから出土した土器がこの溝に捨てられた時点で毀れたのではなく、他所で毀れたものを、捨場として利用されていたこの溝に投げ捨てたことによると考えられる。

掘立柱建物跡は、掘立柱列7列を含めて13棟分確認されたが、柱穴掘り方からの出土遺物も少なく、判然としないが、中世に属する遺構と考えられ、1号溝で区画される調査区南西部からのみ検出されており、1号溝が屋敷または中世村落の周囲をめぐる溝であったものと考えられる。

調査区の東部から検出された旧河道は、七北田川が現在の位置よりもかなり南西にあって南流していたことを示し、調査区南壁の土層観察から1号溝付近まで流路となっており、調査区からは近世の遺物をほとんど出土せず、近世に生活の場として使われた可能性は少なく、河道が現在のようになってから耕地として利用され、現在に至っているものと考えられる。

以上のように本調査区は、平安時代から中世にかけての遺構と遺物が遺存しており、平安時代には6号溝以西の微高地上に生活の中心があり、その後中世になると1号溝に囲まれた地区に井戸と土壙が繰り返し掘られ、また掘立柱建物も繰り返し建築されたものと考えられる。

尚、今回の調査では、宮城県教育委員会が昭和48年に検出したような古墳時代中期に属する遺構や遺物は検出されなかった。

鴻ノ巣遺跡全体の性格については今後の調査をまちたい。

参　考　文　献

氏家和典　「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって―奈良・平安期土師器の諸問題―」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授還暦記念会編　1967

宮城県教育委員会　「岩切鴻ノ巣遺跡」　宮城県文化財調査報告書第30集　1974

柴桃正隆　『史料仙台領内古城・館』第４巻　宝文堂　1974

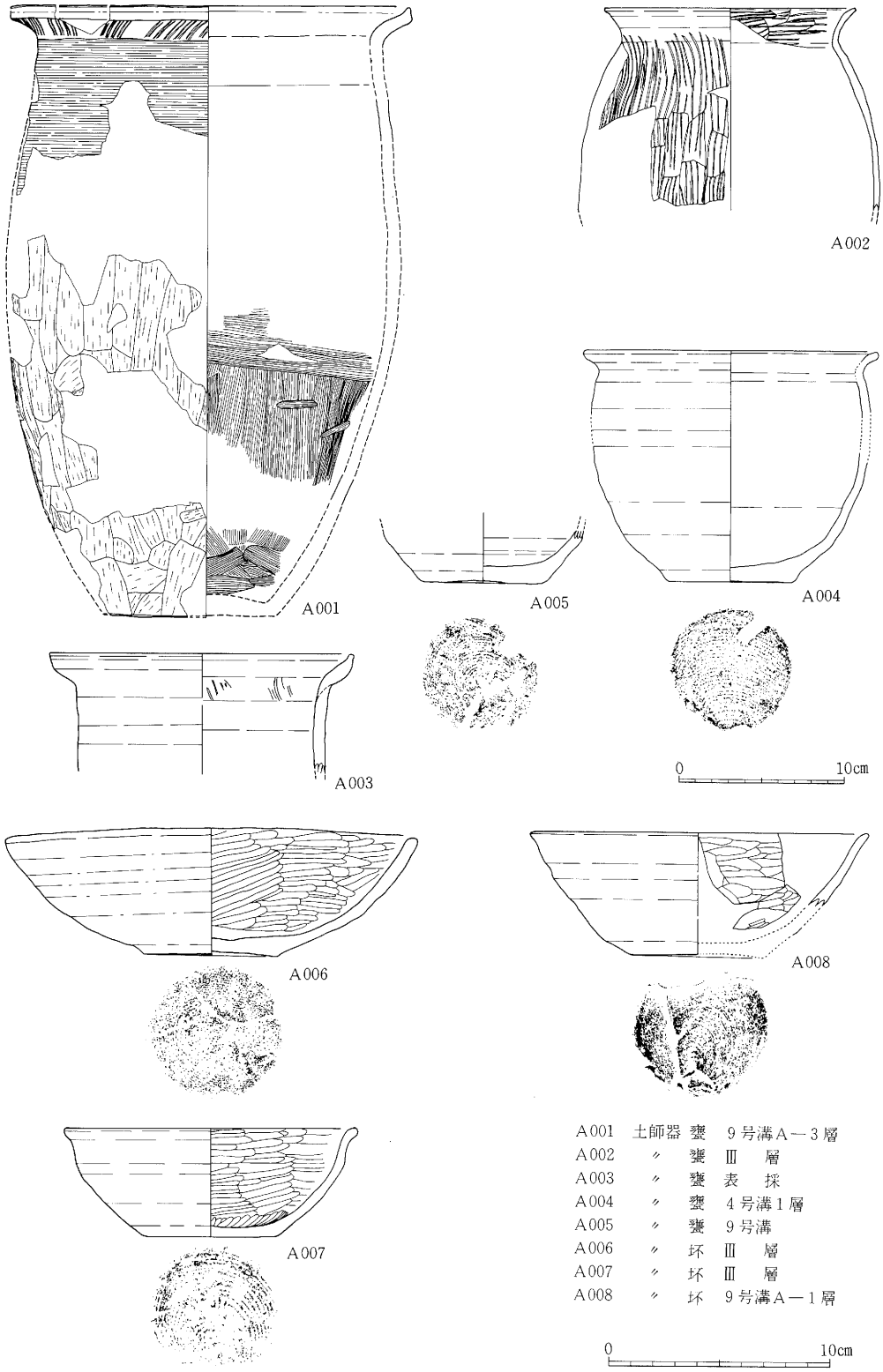
藤沼邦彦　「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館研究紀要』第２巻　1976

藤沼邦彦　「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第３巻　1977

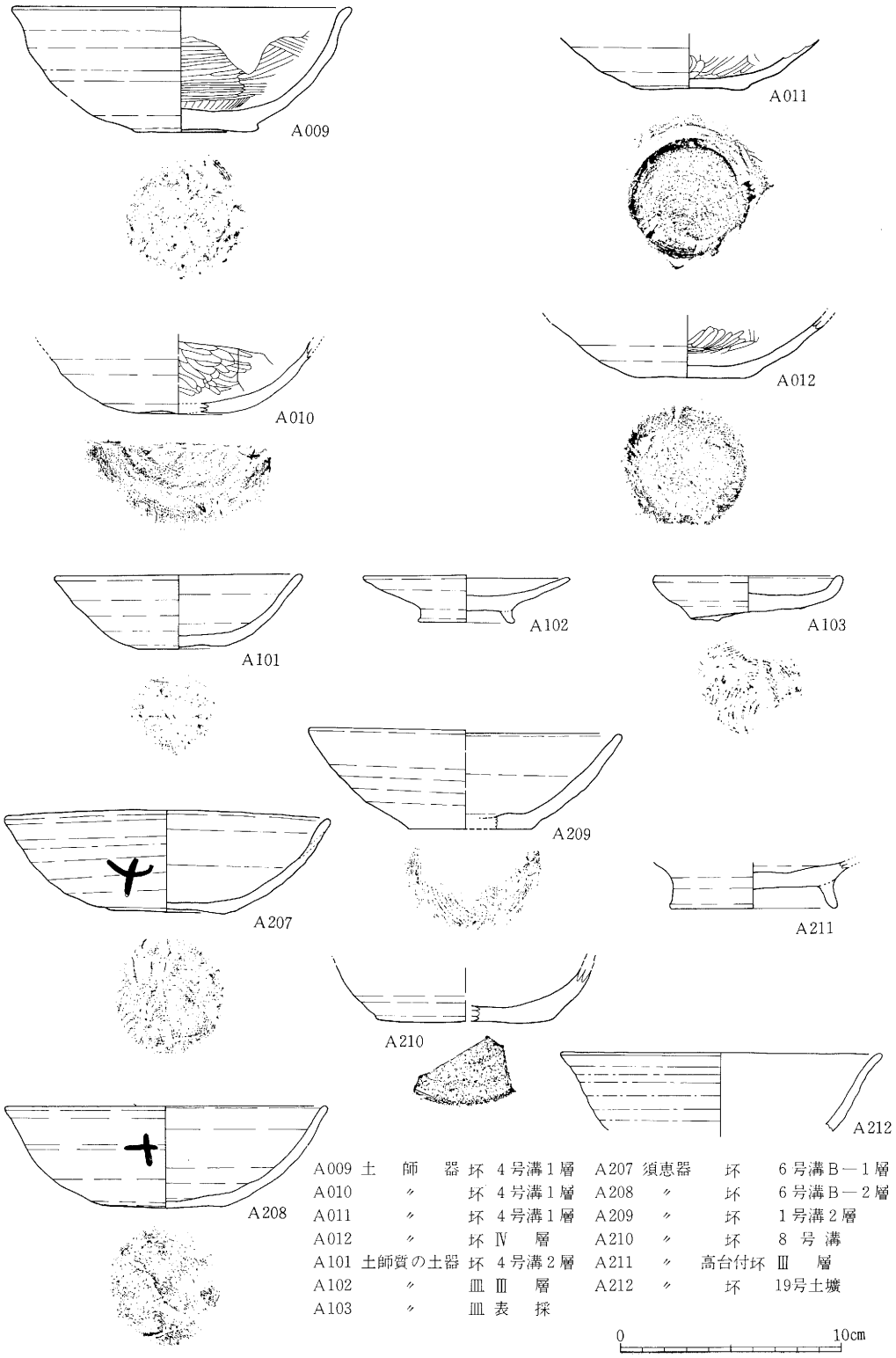
東京国立博物館　『日本出土の中国陶磁』　東京美術　1978

仙台市教育委員会　「今泉遺跡」　仙台文化財調査報告書第24集　1980

宮城県教育委員会　「持長寺遺跡」　宮城県文化財調査報告書第71集　1980

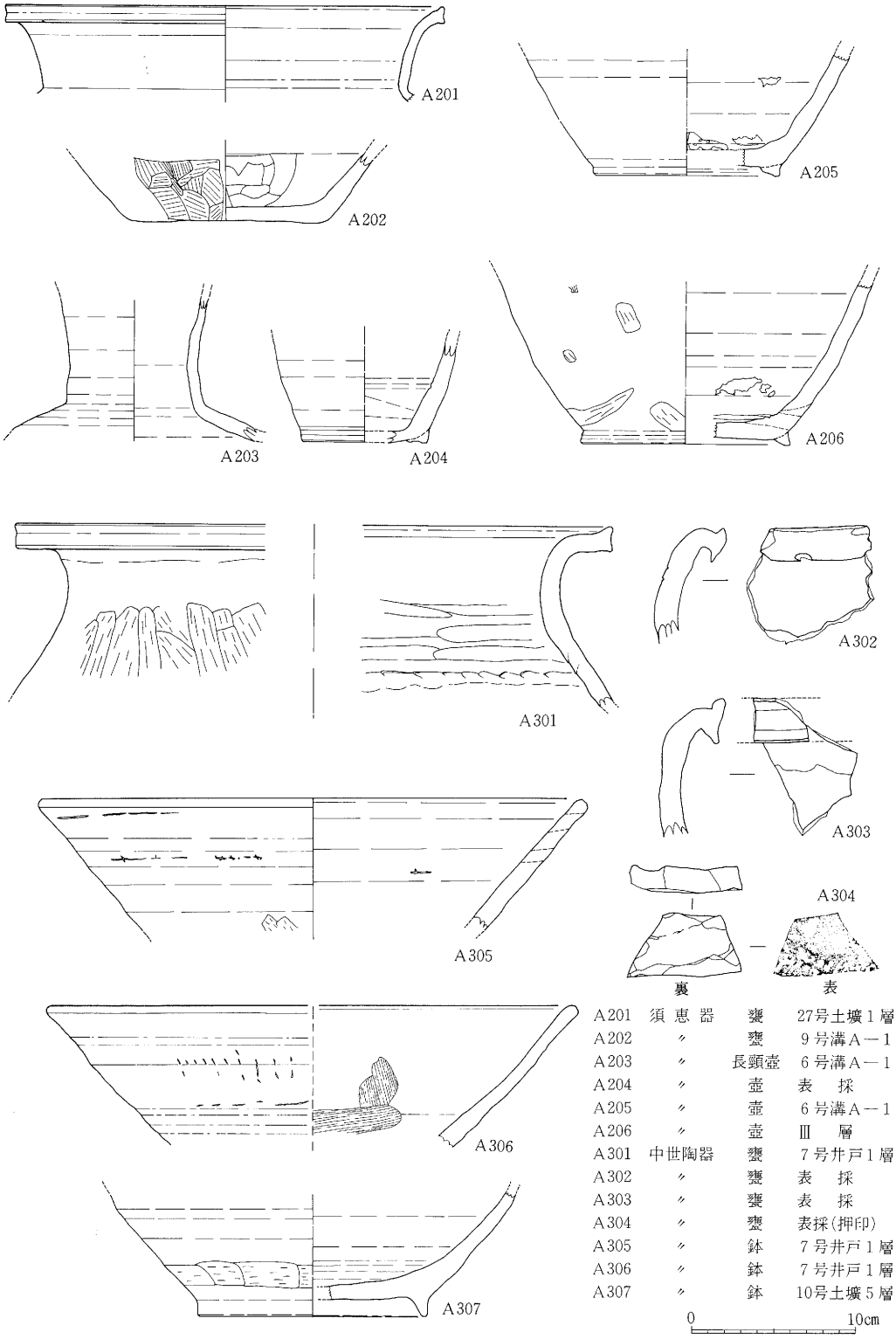


第22図　出土遺物実測図（1）



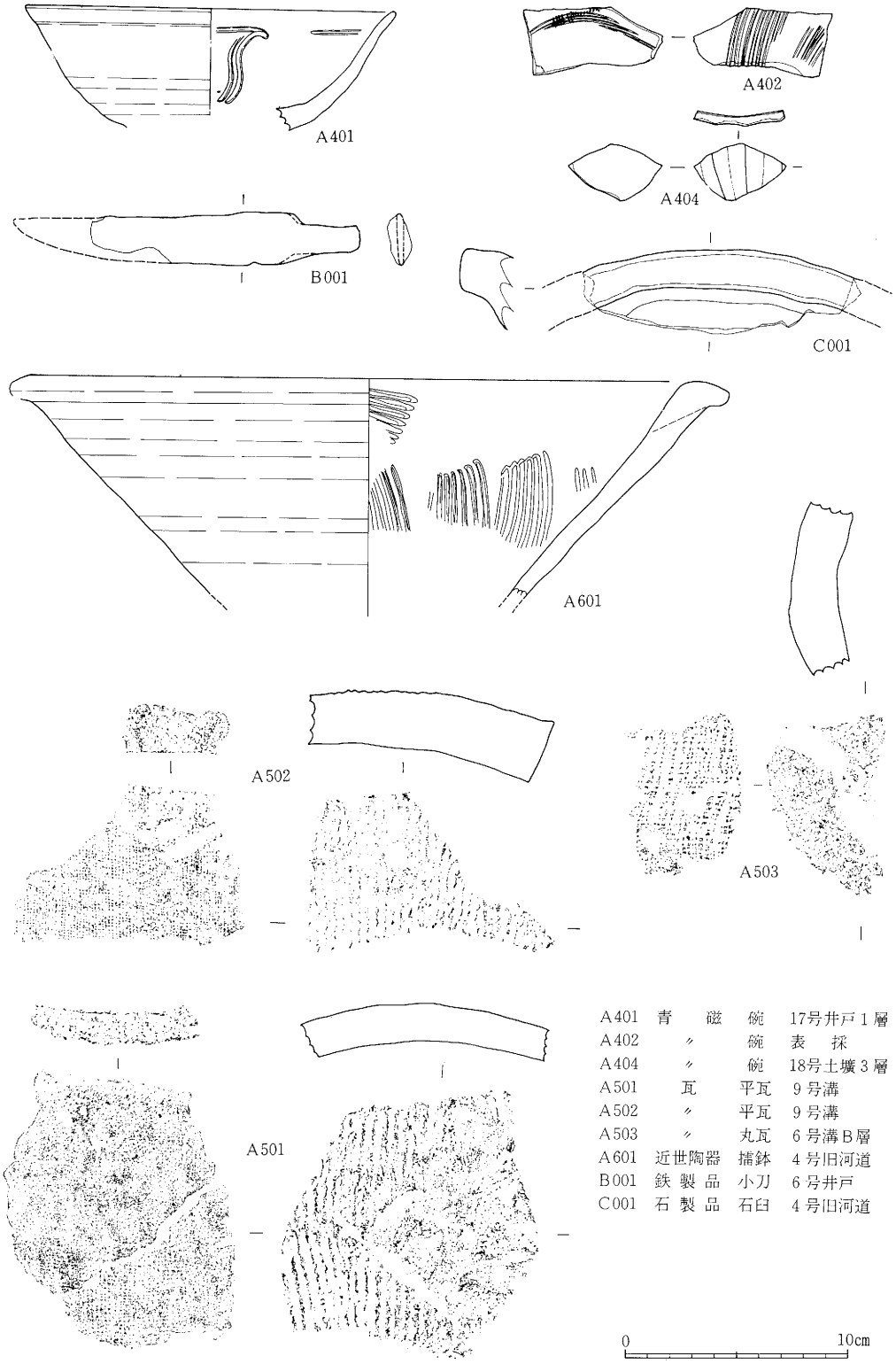
A009	土　師　器	坏	4号溝1層	A207	須恵器	坏	6号溝B—1層
A010	〃	坏	4号溝1層	A208	〃	坏	6号溝B—2層
A011	〃	坏	4号溝1層	A209	〃	坏	1号溝2層
A012	〃	坏	Ⅳ　層	A210	〃	坏	8　号　溝
A101	土師質の土器	坏	4号溝2層	A211	〃	高台付坏	Ⅲ　層
A102	〃	皿	Ⅲ　層	A212	〃	坏	19号土壙
A103	〃	皿	表　採				

第23図　出土遺物実測図（2）



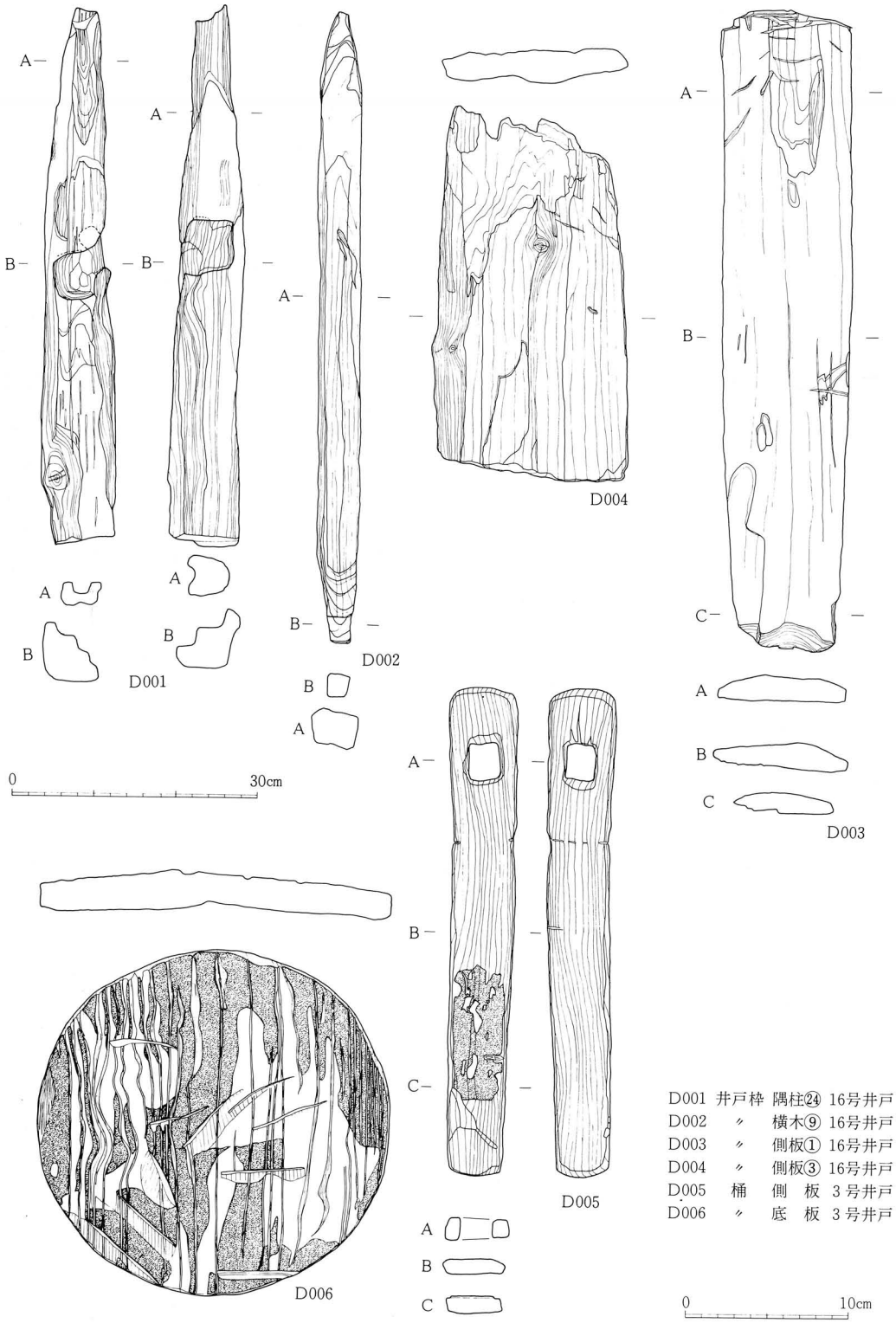
A201	須恵器	甕	27号土壙1層
A202	〃	甕	9号溝A－1層
A203	〃	長頸壺	6号溝A－1層
A204	〃	壺	表　採
A205	〃	壺	6号溝A－1層
A206	〃	壺	Ⅲ　層
A301	中世陶器	甕	7号井戸1層
A302	〃	甕	表　採
A303	〃	甕	表　採
A304	〃	甕	表採(押印)
A305	〃	鉢	7号井戸1層
A306	〃	鉢	7号井戸1層
A307	〃	鉢	10号土壙5層

第24図　出土遺物実測図(3)



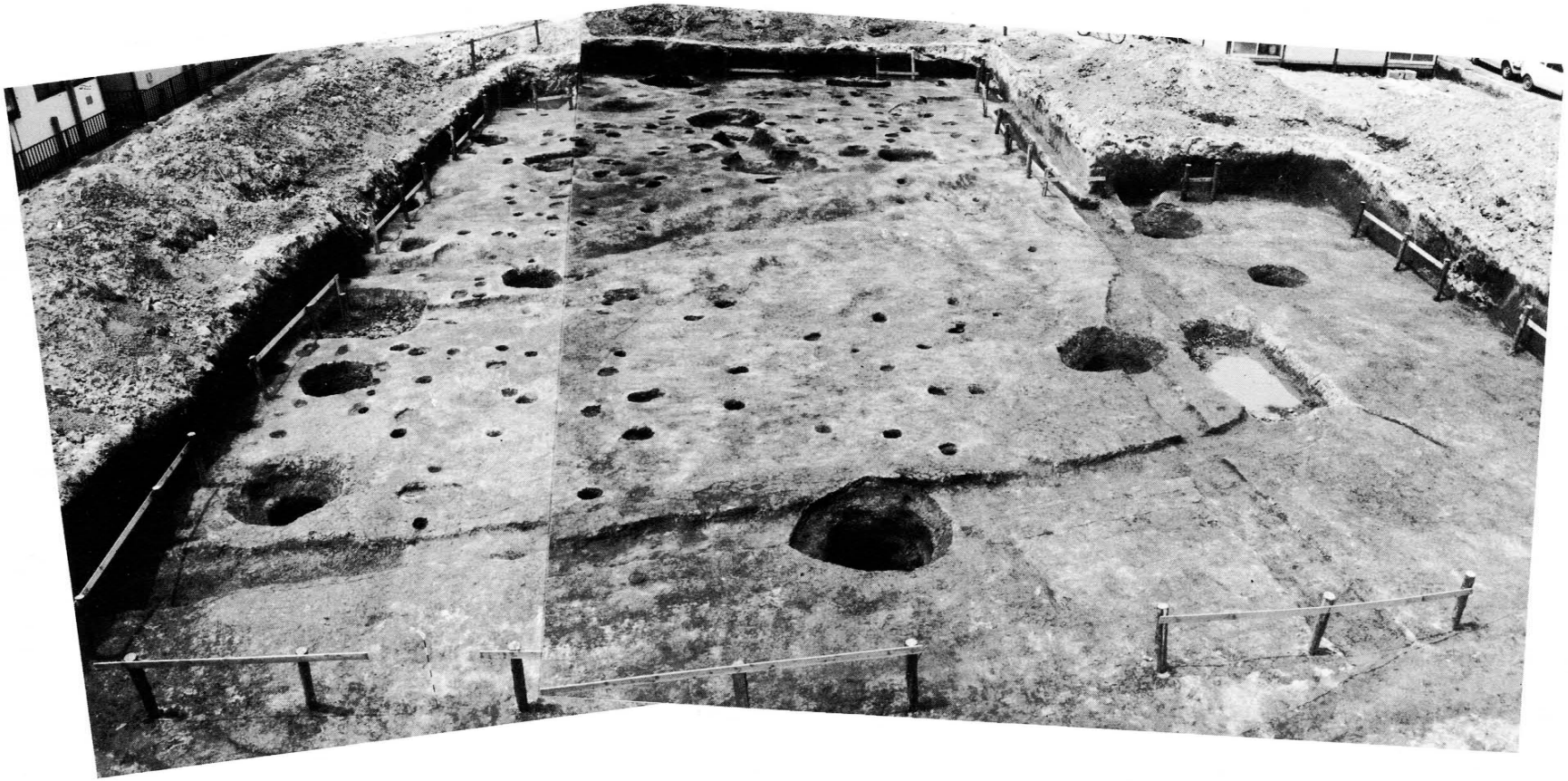
A401	青	磁	碗	17号井戸1層
A402	〃		碗	表　採
A404	〃		碗	18号土壙3層
A501	瓦		平瓦	9号溝
A502	〃		平瓦	9号溝
A503	〃		丸瓦	6号溝B層
A601	近世陶器		擂鉢	4号旧河道
B001	鉄	製品	小刀	6号井戸
C001	石	製品	石臼	4号旧河道

第25図　出土遺物実測図（4）



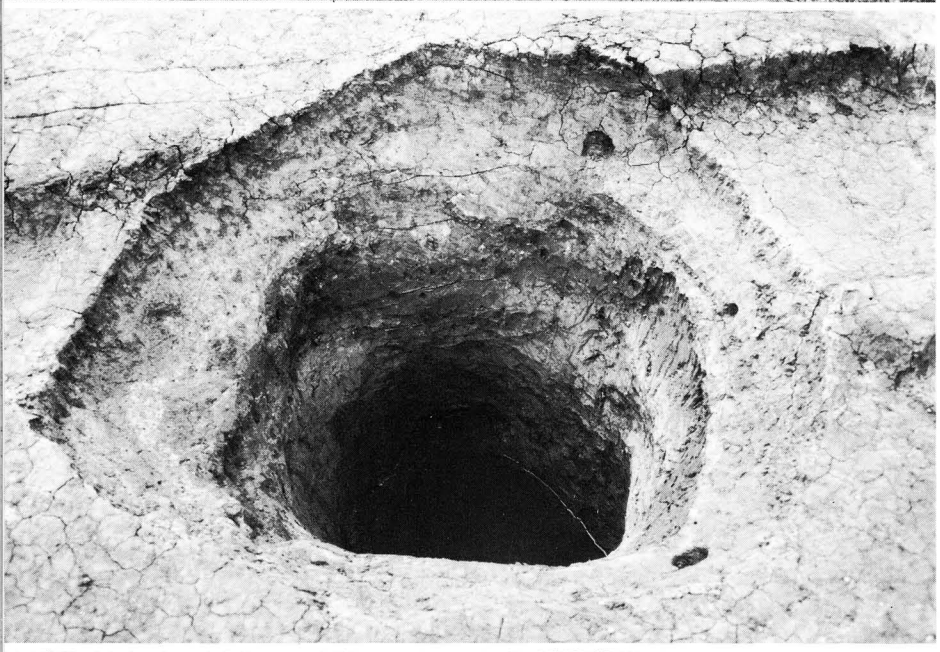
D001 井戸枠 隅柱㉔ 16号井戸
D002 〃 横木⑨ 16号井戸
D003 〃 側板① 16号井戸
D004 〃 側板③ 16号井戸
D005 桶 側 板 3号井戸
D006 〃 底 板 3号井戸

第26図　出土遺物実測図（5）



図版１　調査区全景（東より）

１．調査区遠景
（調査前・東より）



２．16号井戸全景
（東より）

３．16号井戸土層
（北より）

図版３

１．井戸枠材出土状況
（16号井戸・南より）

２．３号井戸全景
（北より）

３．木材出土状況
（３号井戸・西より）

１．桶出土状況
（３号井戸・南より）

２．５号井戸全景
（南より）

３．６号井戸全景
（東より）

図版５

１．７号井戸全景
（西より）

２．９号井戸全景
（北より）

３．10号井戸全景
（北より）

１．15号井戸全景
（北より）

２．17号井戸全景
（北より）

３．４号土壙全景
（西より）

図版７

１．18号土壙全景
（東より）

２．27号土壙全景
（東より）

３．１号焼土遺構全景
（北より）

１．４号溝確認状況
（南より）

２．４号溝土層
（Ａ―Ａ´、北より）

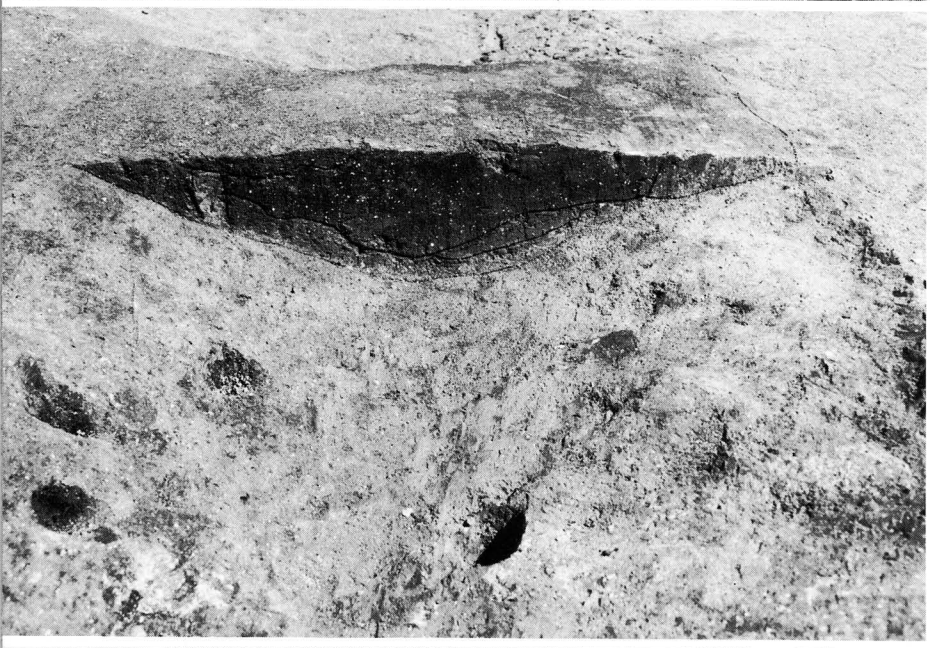
図版９

１．４号溝土層
（Ｂ―Ｂ´、北より）

２．土師器甕Ａ004出土状況
（４号溝、西より）

３．土師器坏Ａ009・Ａ010
出土状況（４号溝、西より）

1．土師質の土器Ａ101
出土状況（４号溝、西より）



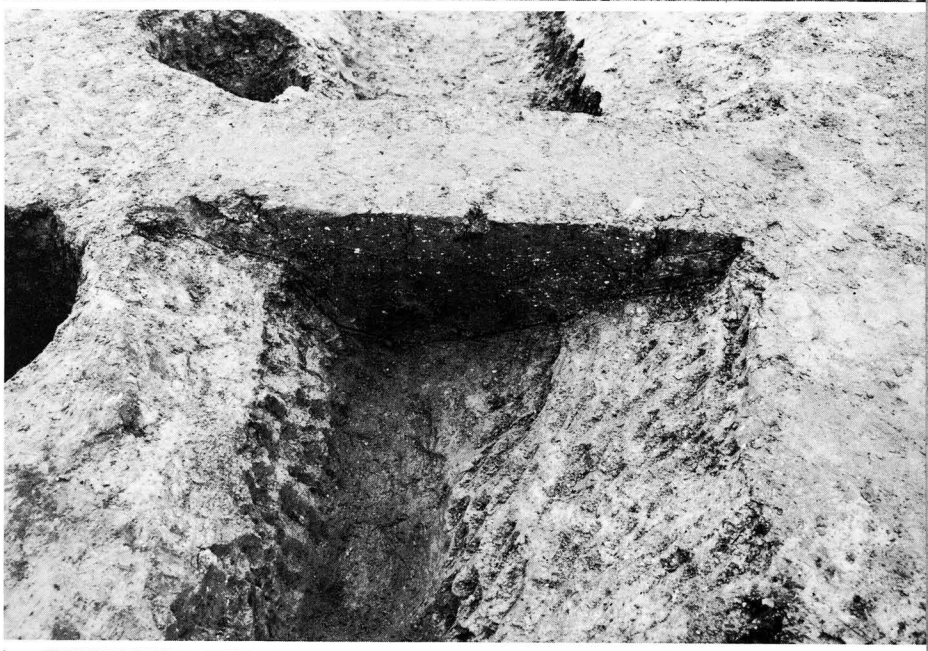
2．６号溝Ａ層土層
（南より）

3．６号溝Ｂ層土溝
（南より）

図版11

1．須恵器坏Ａ207・208
出土状況（６号溝、北より）

2．８号溝土層
（東より）

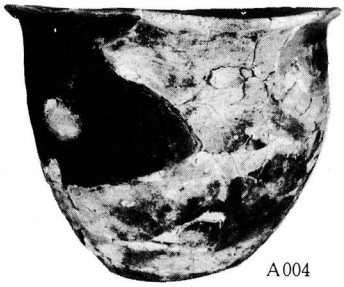


3．９号溝全景
（東より）

A001

A002

A101



A004

A102

A103

A006

A007

A001	土　師　器	甕
A002	〃	甕
A004	〃	甕
A006	〃	坏
A007	〃	坏
A101	土師質の土器	坏
A102	〃	皿
A103	〃	皿

図版12　土師器・土師質の土器

A203

A205

A206

A209

A207

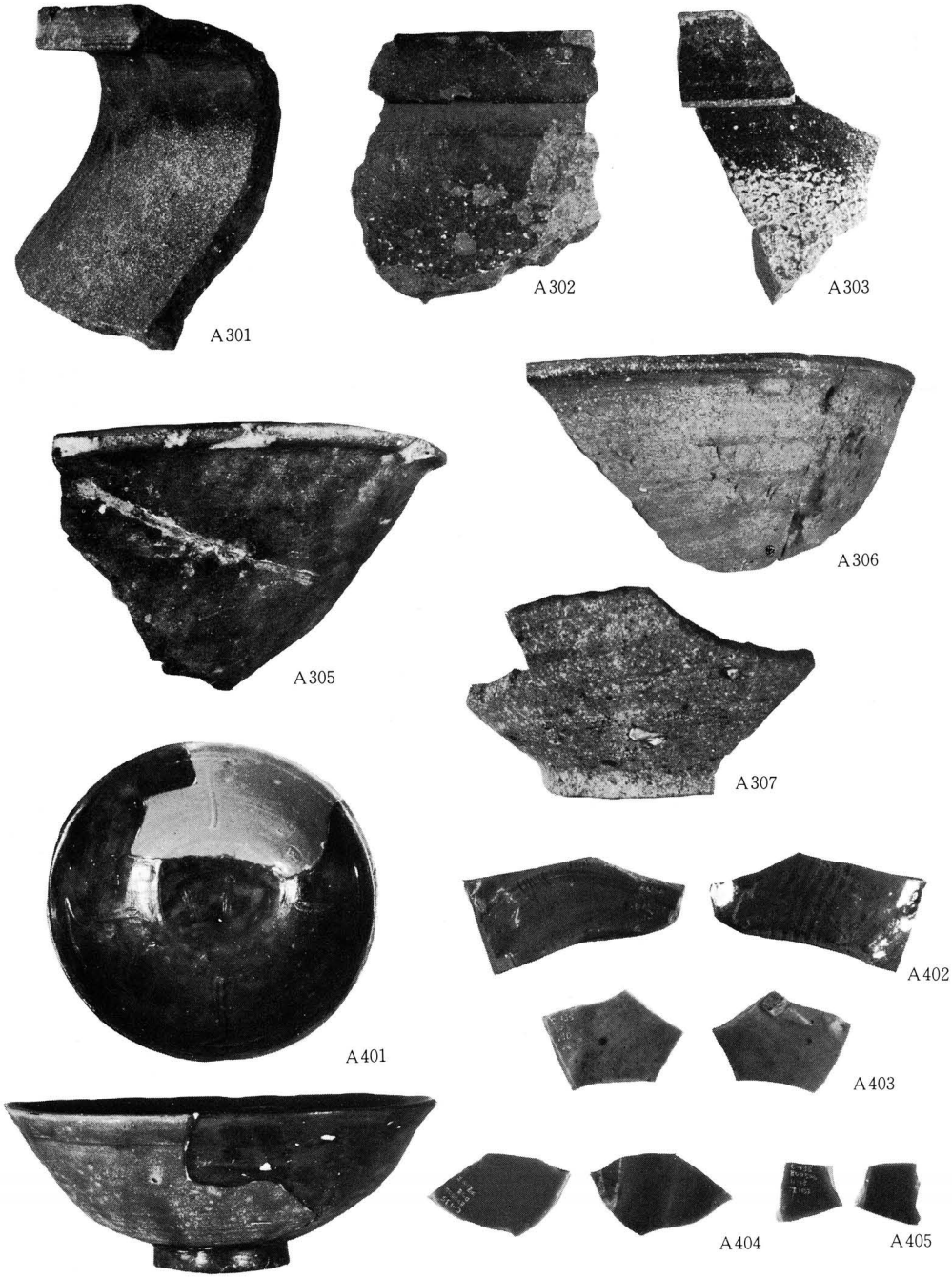
A208

墨書「十」

A203　須恵器　長頸壺
A205　〃　壺
A206　〃　壺

A207　須恵器　坏　墨書「十」
A208　〃　坏　〃「十」
A209　〃　坏

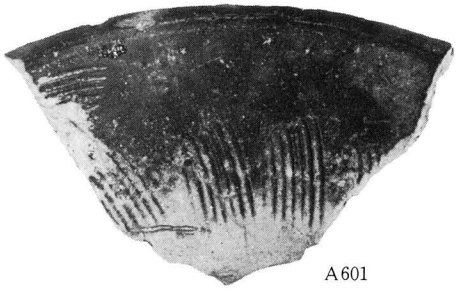
図版13　須　恵　器



A301	中世陶器	甕	A305	中世陶器	鉢	A401	青磁碗(劃花花弁文)
A302	〃	甕	A306	〃	鉢	A402〜A405	青磁碗
A303	〃	甕	A307	〃	鉢		

図版14　中世陶器・青磁

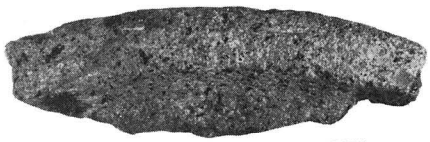
B001



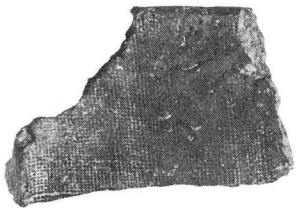
A601

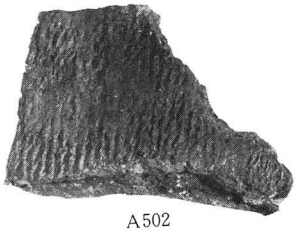
B101

B102

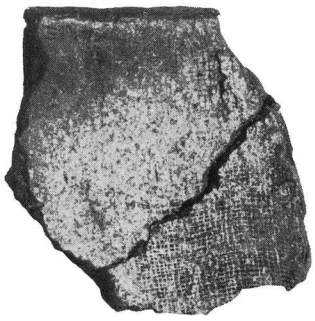


C001





A502



A501

A501	瓦	平	瓦
A502	〃	平	瓦
A601	近世陶器	擂	鉢
B001	鉄製品	小	刀
B101	古	銭	聖宋元宝
B102	〃		・・元宝
C001	石製品	石	臼

図版15　瓦・近世陶器・金属製品・石製品

3号井戸 出土桶側板

D005

横木⑨・D002

横木

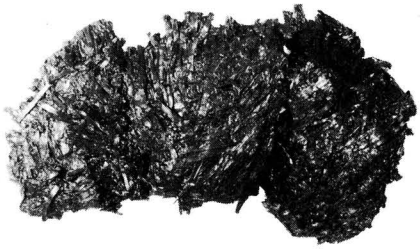
側板⑮

16号井戸枠材

D006

D005　桶側板（柄穴）

D006　桶底板



植物遺体（16号井戸出土）

図版16　木製品・植物遺体

職　員　録

社会教育課

課長	永野昌一
主幹	早坂春一

文化財管理係

係長	鈴木昭三郎
主査	鈴木高文
主事	山口宏
〃	渡辺洋一

文化財調査係

係長（兼）	早坂春一
教諭	加藤正範
主事	田中則和
〃	結城慎一
〃	柳沢みどり
教諭	青沼一民
主事	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	工藤哲司
〃	渡部弘美
〃	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	吉岡恭平

（56.1.1採用）

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙　台　城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告書Ⅰ（昭和55年３月）
第22集　経　ヶ　峯（昭和55年３月）
第23集　年　報　１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第28集　年　報　２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）

仙台市文化財調査報告書第32集

昭和56年度

鴻　ノ　巣　遺　跡

昭和56年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　ＴＥＬ63－1166